『比較論理学研究』第 10 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2012)

中世インドの仏教説話
—*Avadānakalpalatā* 及び *Aśokāvadānamālā* 所収「ウパグプタのマーラ調伏物語」—*

山崎一穂

1 はじめに

ネパールに伝承されている北伝の仏教説話を「アヴァダーナ」と総称するならば、これらは初期と後期の二つに大別される。前者に属するのは *Avadānaśataka* (Avś)、*Divyāvadāna* (Divy)、*Sumāgadhāvadāna* に代表される説話集もしくは単立の説話である。後者に属するのは主に 11 世紀以降に成立したと考えられる説話群、すなわち *Bhadrakalpāvadāna* や °avadānamālā の名を表題に含む説話群である。Āryaśūra (四世紀頃) や Haribhaṭṭa (五世紀頃) の *Jātakamālā*、Kṣemendra (11 世紀) の *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (Av-klp) といった作品は初期後期の何れにも属さない。何故ならこれらは主に宮廷での朗誦等を目的として著された「仏教カーヴィア」という範疇の作品に分類されるからである[1]。また *Avadānasārasamuccaya* や *Jātakamālāvadānasūtra* といった作品も新たに書き下ろされた作品ではないので、初期後期のアヴァダーナからは除外される。

北伝の仏教説話の研究史を振り返るに、先行研究者の関心を集めて来たのは初期アヴァダーナ文献である。一方後期アヴァダーナ文献は等閑視され、多くの作品が写本の侭伝承されているのが現状である。後期アヴァダーナ文献が研究者から無視されて来たのには次の事情が考えられる。

- 後期アヴァダーナ文献の大部分が初期アヴァダーナ文献からの借用詩節や詩形改稿部分から構成されていること
- このような構成上の理由から、後期アヴァダーナ文献は初期アヴァダーナ文献の焼直しに過ぎず、歴史・思想的価値に乏しいと理解されて来たこと

本論で扱う *Aśokāvadānamālā* (AAv-m) を評した PRZYLUSKI [1923: xv] の言は、そうした研究者達の見解を代表していると言えよう。

---

*本論執筆に際し九州大学の岡野潔先生より Av-klp の写本 AB 及びダライラマ五世版 Z、AAv-m の写本 N_1N_2 の複写を、片岡啓先生より Av-klp の写本 E の複写を頂いた。記して御礼申し上げる。

[1]尤も我々が叙事詩とヒンドゥー教のカーヴィア作品を峻別することが困難であるように、「仏教カーヴィア」と初期後期のアヴァダーナの厳密な線引きを行うことは難しい。Āryaśūra の *Jātakamālā* の中には南伝の *Jātaka* の偈が出て来るし、Divy のアショーカ王伝説には仏教チャンプー文学の先駆となる Kumāralāta (二世紀後半) の *Kalpanāmaṇḍitikā* が借用されているからである。

«Peu instructif quant à son contenu, parce qu'il reproduit des légendes que nous possédons par ailleurs dans des rédactions plus anciennes, l'*Açokāvadāna-mālā* n'est donc pas négligeable sous le rapport de la composition.»

しかし PRZYLUSKI [1923] の言に代表される後期アヴァダーナ文献の理解は極めて表面的である。確かに後期アヴァダーナ文献は一見するとAvśやDivyといった古い作品の偈を借用し、散文部を韻文体に改稿して繋ぎ合せた無機質な作品という印象を受ける。しかし後期アヴァダーナ文献の編者達は編纂に当たり、材源としたAvśやDivyの説話の分量を時に数倍に膨らませていることもまた事実である。そしてそこからは後期アヴァダーナ文献が編纂された時代の仏教の教義としてではなく、生きた信仰としての姿を我々は知ることが出来る。

本論は後期アヴァダーナ文献に属する説話集AAv-mの第二章Upagupta所収の物話「ウパグプタとマーラの物語」を取り上げ、その全体像を提示し、物語編纂の背後にあった歴史事情及び編纂意図の一端を明らかにしようとするものである。

2 AAv-mに関する先行研究

AAv-mとはどのような文献か。またこれまでどのような観点から研究がなされ、何が検討されず残されているのか。これまでになされたAAv-mに関する先行研究を概観しよう。

2.1 MITRA [1882]

AAv-mの存在を初めて学界に報告したのはMITRA [1882] である。MITRA [1882: 6–17] はBrian Houghton HODGESONがネパールで蒐集しカルカッタのベンガル・アジア協会へ送ったAAv-mの一写本(SBLN, B. 3)に基づいてAAv-m全26章の梗概を紹介した[2]。MITRA [1882] はAAv-mに存するアショーカ王の系譜がDivyにも王名が一部相違した形で現れることを指摘し、*Viṣṇupurāṇa*、*Mahāvaṃsa*中の王統系譜と対照させた。またAAv-m全26章276葉のうち、アショーカ王の伝記を含むのは第六章までの100葉程で、そこに語られる内容はDivy所収のアショーカ王伝説のそれと同一であり、それらについて漢訳経典中に三つの並行話が存することを明らかにした。

2.2 FEER [1891]

FEER [1891] はAvśの仏訳の序文で*Kalpadrumāvadānamālā* (KalpAv-m)、*Ratnāvadānamālā* (RAv-m) と題する二つの後期アヴァダーナ文献の写本を検討した。FEER [1891: xvi–xviii] は二写本を吟味した結果、KalpAv-m第1–24章とRAv-m第1–20章がそれぞれAvśの各10グループのうち[3]、第四グループを除いた残る九つのグループの二番目と三番目の物語、四番目と五番目の物語と規則的な対応関係を持つことを発見した。またFEER [1891: xviii–xix] はパリ国会図書館所蔵のAAv-mの一写本とAvśとの対応関係を検討し、AAv-m第14–21章が、第四グループを除いたAvśの各10グループの第一番目の物語とパラレルであることを指摘した。FEER [1891: xxi–xxii] は以上の対

[2]ベンガル・アジア協会所蔵写本は第16章Valgusvaraに相当する部分を欠く。
[3]Avśの構成についてはFEER [1891: xiv–xvi]、岩本 [1967: 113–122] を参照されたい。

応関係から、これら三つの Av-m が失われた一つの作品の一部を成すものであった可能性を推定し、その文体と説話材源、編者について次のような特徴を指摘した。

- Avśは基本的に散文体であるのに対し、Av-m 類は韻文体である。
- Av-m 類は Avśの散文間に挿入された韻文を借用または Avśの散文を同じ表現を用いて韻文で再現しながら Avśの物語の筋を忠実に追っている。しかし Avśの簡潔な部分をかなり敷衍している。
- Av-m 類は Avśと同一の話を提示し、基本的に異読を示すことも稀であり、異読も重要なものではない。
- Av-m 類はアショーカ王とウパグプタ長老の対話を枠物語とする。
- Av-m はヴィシュヌ神や阿弥陀仏 (Amitābha)、極楽 (sukhāvatī) に関する記述等、一層新しい時代に属する編纂物としての痕跡を残しているが、Avśはこれらに触れていない。

以上に基づき FEER [1891] は Avśと Av-m 類の前後関係について、Av-m 類が Avśより後に成立した可能性が尤もらしいと推定した。

2.3 SPEYER [1909]

FEER [1891] の研究を基に彼の説を補強、修正しながら[4]、Av-m 類について再考したのは SPEYER [1909] である。SPEYER [1909] は Avśの校訂テキスト第二巻冒頭に付した序文で、Av-m 類の編者、成立年代について論考を加え、KalpAv-m 第 10 章をパリ国会図書館所蔵写本 (FILLIOZAT Cat, #26–27)、ケンブリッジ大学図書館所蔵写本 (BENDALL Cat, Add. 1590) を基に校訂した。

SPEYER [1909: xxvi–xxxv] は Av-m 類の編者について、以下のような事実に基づいて、その編者が大乗仏教の信奉者であったと推定した。

- Av-m 類の編者は Avś所収の物語の導入に置かれる定型文をかなり自由に改変している。そこには、仏陀が Avśに登場する者達だけでなく、「仏子 (Jinarausa) や諸菩薩によって囲まれていた」という記述が見られる。
- Avś第 43 話に相当する RAv-m 第四章では、仏陀が地獄界、餓鬼界の住人を改心させると共に三宝に帰依させ、帰依した彼等が仏陀の光明に触れると人間の生を得、苦行を行い、仏陀を崇敬することで阿弥陀浄土に赴き、阿弥陀仏の教えに従って涅槃を得たということが記述されている。

[4]SPEYER [1909: xxi–xxvi] の主たる修正点は次の通りである。(1) 本来 RAv-m 第 16 章に来る筈の Avś第 54 話は、KalpAv-m 第 20 章に既に並行話があるので、RAv-m 第 16 章には Avś第 54 話に相当する物語は収録されていない。FEER [1891] が RAv-m 第 16 章を Avś第 32 話の並行話としたのは誤りで、実際には Divy 第 20 章の並行話にあたる。(2) 「KalpAv-m と RAv-m が Avś第四グループを除いた各十グループの第五話から 10 話までから成る厖大な説話集成の一部に違いない」という FEER [1891] の見解は余りに過信的である。我々が断言できるのは「KalpAv-m と RAv-m に示される方式に従って配列された第二の説話集成は未だ現れていない」というだけのことである。(3) FEER [1891] が Av-m 類が Avśより後に成立した可能性を留保したのには賛同できない。何故なら Av-m 類の物語は原則的に Avśの物語と全く同じ順序で、Avśのテキストの言い換えの形をとって物語を叙述しているだけでなく、Avśの定型句や物語の要点もかなりの正確さを以て同じように言い換えているからである。

以上から SPEYER [1909] は Av-m 類が成立した時代、地域の大乗仏教僧達が古い上座部のアヴァダーナ集成が教導的な物語として適当であると考え、それらを自分達の信条に合うように Av-m として翻案し、説法の手段として役立てたと推定した。また Av-m の成立年代について SPEYER [1909: xxxv–xxxvi] はそれを西暦 400–1000 年の間に置いた。彼はその根拠として次の点を挙げる。

- KalpAv-m、RAv-m、AAv-m には、晩餐の後蒟醤の葉を噛む習慣に関する記述が見られる。しかしこの記述は Avś や Divy の古い散文には見られない。従ってこれら三つの Av-m が編纂されたのは蒟醤の葉を噛む習慣が普及した後である。
- KalpAv-m は第三章、第 10 章、RAv-m は第 32 章において、それぞれ Āryaśūra の *Jātakamālā* 第三章 21 詩節、第 26 章第 42–44 詩節、第 28 章 30、31、33–52 詩節を借用している。Āryaśūra の年代は四世紀頃に置かれるから、KalpAv-m と RAv-m の成立はそれ以前ではあり得ない。
- これら Av-m 類の文体、精神はプラーナに広く見られるそれらとの親近性を示す。

2.4 ZINKGRÄF [1940]

AAv-m の個別の章に関する研究は ZINKGRÄF [1940: 87–117] をその先蹤とする。ZINKGRÄF [1940: 87–117] は Av-klp 第 87 章 Padmaka の詩節の大部分が AAv-m 第 26 章 Padmaka のそれと一致することを発見し[5]、AAv-m のケンブリッジ大学所蔵写本 (BENDALL Cat, Add. 1482) の転写を行い、対応する Av-klp のテキストと対照させた。ZINKGRÄF [1940: 110] は両者の詩節の一致が Kṣemendra が AAv-m を基に第 87 章 Padmaka を著したことを説明すると結論付けた。

2.5 BONGARD-LEVIN and VOLKOVA [1963, 1965]

BONGARD-LEVIN and VOLKOVA [1963, 1965] はレニングラードのロシア科学アカデミー東洋学研究所所蔵の AAv-m 一写本に基づいて第五章 Kuṇāla の転写を行った。BONGARD-LEVIN and VOLKOVA [1963: 120] は同章 329 詩節のうち 160 詩節がこれに並行する Av-klp 第 59 章 Kuṇāla (総詩節数 171) の詩節と、33 詩節が Divy の並行話のそれと一致することを明らかにした。

2.6 岩本 [1967]

MITRA [1882] 以来の研究成果を基に AAv-m の構成について再考したのは岩本 [1967] である。岩本 [1967: 179–188] は AAv-m の全 27 章がアショーカ王伝説を中核として六段階の成立過程を経て成立したと推定し、全 27 章を次のように区分した。

第一部	第 1–6 章	第四部	第 14–21 章
第二部	第 7–10 章	第五部	第 22–26 章
第三部	第 11–13 章	第六部	第 27 章

[5]岩本 [1967: 25] に「Aśokāvadānamālā 〔26〕 Padmakāvadāna および Bodhisattvāvadānakalpalatā 〔99〕 Padmakāvadāna」とあるのは訂正を要する。Av-klp に同名を冠する章が第 87 章と第 99 章に二つある為であるが、ZINKGRÄF [1940: 110] に "Saptâśītitamaḥ pallavaḥ" とあるのを踏まえていれば、このような誤りは生じなかった筈である。

岩本 [1967] による全六部の内容説明は次の通りである。第一部に含まれる第 1–6 章はアショーカ王伝説に関する章であり、Divy 第 26–29 章と共通の材源に基づく異系の所伝である。第二部に含まれる四つの章は種々の徳行を讃嘆する内容であり、第九章 Bodhicaryāvatārānuśaṃsa には Śāntideva (七世紀末から八世紀中頃) の *Bodhicaryāvatāra* がそのまま借用されている[6]。第三部と第五部は単行の説話の集成であり、第 22, 25–26 章はそれぞれ Av-klp 第 78, 84, 87 章に並行話が存在し、第 23 章を除く残る四章も別な文献に並行話を持つ。第 14–21 章は Avśの各 10 グループ (第四グループを除く) の第一話の詩形改稿部である。第六部に含まれる一章は陀羅尼の読誦を推奨する密教経典で、後代の付加と考えられるものである。

岩本 [1967] はまた AAv-m 第 24 章 Bhavaśarma を校訂し、校訂テキストを補遺として添えた。校訂に用いたのはベンガル・アジア協会所蔵写本 (SBLN, B. 3) と同章にパラレルな章を含む京大所蔵の *Vratāvadānamālā* の写本 (GOSHIMA and NOGUCHI Cat, 101) の二本である。

2.7 HAHN [1977, 1990]

岩本 [1967] が AAv-m 第三部に分類した Saptakumārikā、Bhavalubdhaka、Puṇyarāśi という三つの章のうち、第 11 章 Saptakumārikā は Gopadatta (400–800 年の間) による仏教カーヴィア *Saptakumārikāvadāna* を詩形改稿したものであることが HAHN [1977: 14] によって明らかにされた[7]。

第 12 章 Bhavalubdhaka は 214 詩節から成り、これを校訂した HANDURUKANDE [1984: 11–12] によると、109 の詩節が *Avadānasārasamuccaya* (BENDALL Cat, Add. 1598) 第五章のそれと一致し、残る詩節は同章の散文部を詩形改稿したものだという。*Avadānasārasamuccaya* は HAHN [1977] によると、その第 1–5 章にあたる物語を Gopadatta の *Jātakamālā* から抽出し、Haribhaṭṭa の *Jātakamālā* から抽出した説話に接続させて編纂された作品だという。

第 13 章 Puṇyarāśi は 68 詩節から成り、HAHN [1990] はその文体から判断して、同章も Gopadatta の作品を詩形改稿したものであろうと推定した。HAHN [1990] によれば当該章の最初の 10 詩節と帰結部の九詩節は AAv-m の編者の手によるものであり、śloka 調の第 18, 22–26, 40–41, 52–53 は Gopadatta の種本の散文部を詩形改稿したものである。残る 39 詩節は Gopadatta の真作と考えられ、10 種の韻律が用いられており、うち八種は Gopadatta が最も頻繁に使用した韻律だという。

---

[6]Śāntideva の活躍年代は (1) 義浄と玄奘がŚāntideva に言及していない、(2) Śāntarakṣita の論書 *Tattvasiddhi* に *Bodhicaryāvatāra* から一詩節が引用されているという二点に基づき、義浄がインドを発った 685 年から Śāntarakṣita がチベットに発った 763 年の間に置かれている。Śāntideva の年代推定に関する研究史については DE JONG [1975: 179–180] を参照されたい。

[7]Gopadatta に帰せられる仏教カーヴィアには蔵訳が存在しないが、*Saptakumārikāvadāna* には例外的にテンギュルに蔵訳が残されており、DARGYAY [1978] によってその校訂テキストが発表された。しかし蔵訳のコロフォンには作者名が gSang bas sbyin (*Guhyadatta) とある。DARGYAY [1978: 42–43] はこれを説明する理由として (1) gSang bas sbyin は *Guptadatta とも還梵され得ること、(2) Gopadatta の異名の一つが Guhyadatta であった可能性があること、(3) 同名のテキストが別の人物に帰せられた可能性があることを挙げている。しかし *Saptakumārikāvadāna* の蔵訳が梵本に密に従属していることに留意すべきであり、作者が如何なる名であったかということは重要ではないと述べて著者問題に幕を引いている。

2.8 岡野 [2005]

岩本 [1967] は ZINKGRÄF [1940] らの研究成果から AAv-m の第一、第五部類に分類した章に Av-klp との逐語的な詩節の一致が見られることを認識していたが、前者が後者から採られたものであるという説には慎重な態度をとった。この説を説得力ある形で証明したのは岡野 [2005] である。岡野 [2005] は AAv-m 第一部類に当たる第 1–3 章が Av-klp 第 71–72, 69 章、第二部類に当たる第七章が Av-klp 第 73 章、第五部類に当たる第 22–26 章が Av-klp 第 78, 81–82, 84, 87 章から逐語的に多数の詩節を借用していることを明らかにした。また岡野 [2005] は以下の証拠に基づいて AAv-m を含めた Av-m 類の成立年代が SPEYER [1909] が言うように西暦 400–1000 年の間に成立したのではなく、Av-klp が著された 1052 年以降に成立した可能性が高いと結論付けた。

- Av-m 類が共通して Avś第四グループに含まれる物語を欠いている理由は、Av-m の編纂者が Avśの詩形改稿を行う上で Av-klp 所収の物語と重複することを避けたことによる。それが証拠に Avś第四グループに含まれる物語の殆どは Av-klp に並行話を持つ。
- Av-m 類に借用されている Av-klp の詩節は例外なく 41 章以降のものである。西暦 1302 年に筆写された Av-klp の最古の写本 (BENDALL Cat, Add. 1306) は第 1–40 章までを欠いているので、Av-klp を材源として編纂された Av-m 類の各章の成立年代は西暦 1302 年以降ということになる[8]。

以上がこれまでになされた AAv-m に関する研究である。これらを総合すると AAv-m という文献の性格は次のように要約されよう。

- 初期アヴァダーナ文献のみならず仏教カーヴィア、大乗論書の詩節を借用、もしくは散文部を韻文体に改稿して繋ぎ合せた、寄せ木細工のような作品である。
- 一部の説話の材源は上座部の伝承に求められる。しかしそこには大乗仏教の要素が加味されている。

3 AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」の構成

先行研究の成果により AAv-m 全 27 章の全体像は明らかにされたと言って良い。しかしこれまでの研究はいずれも AAv-m の構成に関するものか、一部の断片的な写本転写に留まっている。AAv-m が成立する歴史・思想的背景に関する問題も議論されているが、それらも Avśの詩形改稿部である第 14–21 章のみを対象としたものである。こうした問題点に照らし、限定的ではあるが、AAv-m 第二章所収「ウパグプタとマーラの物語」を基に、AAv-m の成立背景に関する問題を以下に検討してみよう。

まず AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」の構成を概観しておこう。AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」は AAv-m 第二章 Upagupta に存する。物語は 247 詩節から成り、これに

[8]岡野 [2005] は Av-m を構成する二つのグループすなわち、A グループ (Avśの詩形改稿部) と B グループ (Av-klp からの借用部) のうち、A が B に先行し、A が 1052 年から 1302 年の間、B が 1302 年以降に成立したという可能性を指摘した。この A グループの成立年代推定は、Av-klp の最古の写本の写経生が Av-klp 第 49 章Saḍḍanta の筆写に当たり KalpAv-m から詩節借用を行ったとする DE JONG [1977] の説に基づくものである。しかしこの説は STRAUBE [2009: 13–17] により再考を余儀なくされている。

並行する Av-klp 第 72 章 Upagupta 所収「ウパグプタとマーラの物語」(総詩節数 33) の八倍の分量に相当する。当該章については Av-klp 第 72 章から第 7–20, 22–25, 27–36, 43–45, 47–49, 51–66, 68–72 詩節、計 55 詩節が借用されていることが岡野 [2005: 371] によって明らかにされている。うち「ウパグプタとマーラの物語」に相当する、Av-klp からの借用詩節は第 43 (42 と訂正されるべきである) 詩節以降の計 27 詩節である。岡野 [2005] の指摘は AAv-m の構成を考える上で重要であるが、Av-klp と AAv-m との関係に重点を置いた為に Divy 第 26 章 Pāṃśupradāna 所収の「ウパグプタとマーラの物語」からの借用詩節に言及していない点が惜しまれる。AAv-m 所収話の詩節と Av-klp、Divy 所収話からの借用詩節との対応関係を示すならば、次の通りである。Divy の頁行数は COWELL and NEIL 本の該当箇所を指す。

N_1 =NGMPP #B94/7	T_1 =MATSUNAMI Cat, New #37	詩節数	Av-klp	Divy
13b1–14b2	23b8–25b6	59	—	—
14b2–4	25b6–10	4	vv. 42–45	—
14b4–13	25b10–26a11	16	—	—
14b13–14	26a11–26b1	2	vv. 47–48	—
14b14–15	26b1–3	2	—	—
14b15–15a2	26b3–5	2	—	358.3–7
15a2–3	26b5–6	2	—	—
15a3	26b6–7	1	—	358.9–11
15a3–4	26b7–8	1	—	—
15a4–5	26b8–9	1	—	358.12–14
15a5	26b9–10	1/2	—	—
15a5	26b10	1/2	v. 49cd	—
15a5–7	26b10–12	3	—	—
15a7–8	27a1–2	2	—	358.17–20
15a8–11	27a2–6	5	—	—
15a11–12	27a6–9	2	—	358.21–23, 25–28
15a12–15b5	27a9–27b7	12	—	—
15b5–6	27b7–9	2	—	359.1–4
15b6	27b9–10	1	—	—
15b7–8	27b10–12	1	—	359.5–8
15b8	27b12	1	—	—
15b8–10	27b12–28a4	4	vv. 51–54	—
15b11–12	28a4–5	2	—	359.12–15
15b12–13	28a5–8	1	v. 55	—
15b13	28a8–9	1	—	359.15–17
15b13–15	28a9–10	2	vv. 56–57	—
15b15–16a2	28a11–28b1	2	—	359.18–22
16a2	28b1	1	—	—
16a2–3	28b1–3	1	—	359.23–25
16a3–4	28b3–5	3	—	—
16a4–8	28b5–11	4	—	359.28–360.4, 6–8, 10–12
16a8–11	28b11–29a3	5	—	—
16a11–12	29a3–4	1	v. 58	—
16a12–16b2	29a4–12	10	—	—
16b2–3	29a12–29b2	3	vv. 59–61	—
16b3–4	29b2–3	1	—	360.21–23
16b4–5	29b3–4	1	—	—
16b5	29b4–5	1	—	—
16b5–7	29b5–7	2	—	360.24–29
16b7–9	29b8–11	4	—	—

N_1 =NGMPP #B94/7	T_1 =MATSUNAMI Cat, New #37	詩節数	Av-klp	Divy
16b9–10	29b11–12	1	vv. 62cd–63ab	—
16b10–11	29b12–30a2	1		361.3–6
16b11–13	30a2–6	5	—	—
16b13–14	30a6–8	1	—	361.11–14
16b14–17a2	30a8–30b1	6	—	—
17a2–3	30b1	1/2	v. 64ab	—
17a3	30b1	1/2	—	—
17a3–4	30b1–3	1	v. 65	—
17a4–5	30b3–4	1	—	—
17a5–6	30b4–5	1	—	361.24–26
17a6–7	30b5–8	3	—	—
17a7–10	30b8–12	3	—	362.1–5, 8–15
17a10–11	30b12–31a2	2	—	—
17a11–12	31a2	1/2	v. 66cd	—
17a12–13	31a2–5	3	—	—
17a13–14	31a5–6	1	—	362.23–26
17a14–15	31a6–7	1	v. 68	—
17a15–17b1	31a7–9	2	—	363.1–4
17b1–2	31a9	1	v. 69	—
17b2–3	31a9–12	3	—	—
17b4–5	31a12–31b2	2	—	363.11–18
17b5	31b2–3	1	—	—
17b5–6	31b3–4	1	v. 70	—
17b6	31b4	1	—	—
17b6–7	31b4–6	2	—	363.23–26
17b8–15	31b6–32a4	13	—	—
17b15	32a4–5	1	v. 71	—
18a1–8	32a5–32b4	13 1/2	—	—
18a8–9	32b4–6	1	v. 72	—
18a9–11	32b6–9	4	—	—
総計		246	25 1/2	37

AAv-m 所収話の編者は Av-klp と Divy (358.3 以降は Kumāralāta の *Kalpanāmaṇḍitikā*) 所収話の詩節を最大限利用し、自らによる詩節を用いて両者を繋ぎ合せていることが理解されよう。

4 クシェーメーンドラ本「ウパグプタとマーラの物語」試訳

以上の物語の構成を考えると、AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」の筋を把握する上で、Divy と Av-klp 所収の並行話の内容を概観することは有益であろう。うち Divy 所収話については既に STRONG [1983: 185–198]、岡本 [2003–2004: 123–136]、平岡 [2008: II, 61–71, 94–100] による翻訳業績がある。Av-klp 所収話の翻訳業績としては引田 [2004] があるが、自由訳に近い内容であり、新たなテキスト解釈の余地があると思われる。そこで以下に Av-klp 第 72 章 Upagupta 第 40 詩節から第 72 詩節までの和訳を試みる。和訳の底本には DĀS and VIDYĀBHŪṢAṆA による校訂テキスト (Calcutta: The Baptist Mission Press, 1918), 574–583 を用いた。また同テキストに対する DE JONG [1979: 158–159] の本文批判及びケンブリッジ大学所蔵写本 A (BENDALL Cat, Add. 1306, 292b2–294b1)、National Archives 所蔵写本 E (reel #B95-5, 71b3–73a1)、ダライラマ五世版 (Tōhoku Cat, #7034, 473b1–476a3) 及びデルゲ版梵文音写 (Khe160a3–163b1) を参照した。梵本との校合に供したチベット訳はデルゲ版 (Khe160a4–163b2)、北京版 (Ge281b3–283a3)、ガンデン版 (Ge354b3–356b4)、ナルタン版テンギュル (Ge251b2–253a2) 及びダライラマ五世版 (473b2–476a4)

の五版である。テキストの提示方法としては最上段に復元され得る梵文テキスト、二段目に写本Aの転写、三段目にダライラマ五世版の転写、四段目に梵文テキストに対する異読、五段目に五版を校合したチベット訳、最下段にチベット訳の異読を提示した。正書法に起因する異読等、非重要な異読はこれを取り上げていない。写本Aの転写にあたって使用した記号は次の通りである。() 判読不確実部、{} 抹消部、.. 判読不能の文字、∘ 紐穴、* 母音省略記号。訳注はテキストの解釈に関係するものに限定した。Av-klp 所収「ウパグプタとマーラの物語」とその並行伝本の説話要素の対応については拙論「ウパグプタのマーラ調伏物語—*Avadānakalpalatā* と *Lokapaññatti* の伝承を中心に—」『比較論理学研究』9 (2011): 63–84 を参照されたい。本話を構成する詩節は anuṣṭubh を基調とし、anuṣṭubh が 33 詩節中 30 詩節を占め、残る三詩節に śārdūlavikrīḍita (第 55, 65 詩節) と mālinī (第 72 詩節) が用いられている。今後の Av-klp の校訂、翻訳研究の資料に供すべく、以下に anuṣṭubh の奇数脚の正規形 (pathyā) と非正規形 (vipulā) の総数・百分比を示す。

pathyā	40, 41, 42a, 43, 44, 45, 46, 47c, 49, 50, 51c, 52, 53, 54a, 57a, 58, 59, 60a, 61, 62c, 63, 64a, 66, 67a, 68, 69, 70, 71c	46	76.67%
na-vipulā	47a, 48c, 51a, 54c, 56ac, 60c, 62a, 64c, 67c, 71a	11	18.33%
bha-vipulā	42c, 57c	2	3.33%
ma-vipulā	48a	1	1.67%
総計		60	

和訳

[1] シャーナヴァーシンの下で出家するウパグプタ

atrāntare śānavāsī samabhyetya prasannadhīḥ |
pravrajyām upaguptasya prāptakālam amanyata || 72.40 ||

[292b2] atrāntare śāṇavāsī samabhyetya prasannadhīḥ |
pravrajyām upaguptasya prāptakālam amanyata ||

[473b1] | a trā nta re shā ṇa bā sī sa ma bhye tya pra sa nna dhīḥ |
| pra bra dzyā mu pa gu pta sya prā pta kā la ma ma nya ta |

40d prāptakālam] AEDZ; prāptakālām Ed.

| skabs der shā na'i gos can ni | | rab dang blo yi mngon phyogs te |
| nyer sbas rab tu 'byung ba yi | | dus la bab par yang dag bsams | 72.40 |

40c yi] PGN; yis DZ.

この間に、曇りなき知性を備えたシャーナヴァーシンがやって来て、ウパグプタが出家する期が熟したと考えた[9]。

[9]校訂本の cd 句の読みは pravrajyām upaguptasya prāptakālām amanyata「ウパグプタが出家する期が熟したと考えた」であり、Tib. はこれを支持する。ところが梵文写本と梵文音写には pravrajyām upaguptasya prāptakālam amanyata とある。従ってこの読みを採用すべきであろう。では cd 句をどのように解釈するかという問題が生じるが、pravrajyā が行為名詞であることに注目すると、prāptakālam を副詞複合語と見做し、pravrajyām に掛け、cd 句を「ウパグプタの、期が熟した出家行為を考えた」すなわち「ウパグプタが出家する期が熟したと考えた」と解釈することが出来よう。

[2] ウパグプタの阿羅漢果獲得とマトゥラー布教

so 'tha pravrajitas tena prāpyārhatpadam uttamam |
saddharmadeśanārambhaṃ vidadhe puravāsināṃ || 72.41 ||

so <'>tha pravrajitas tena prāpyārhatpadam uttamaṃ |
saddharmmadeśanā[3]rambha vidadhe puravāsināṃ ||

| so <'>tha pra bra dzi ta ste na prā pyā rha tpa da mu tta maṃ |
| sa ddha rmma de sha nā raṃ bhaṃ bi da dhe pu rā bā si nāṃ |

| de nas de yis rab byung des | | bla med dgra bcom gnas thob nas |
| grong khyer dag na gnas rnams la | | dam chos ston pa'i rtsom pa mdzad | 72.41 |

41a nas] DZ; na PGN. || yis] DZ; yi PGN.

そして彼 (= ウパグプタ) は彼 (= シャーナヴァーシン) によって出家を許されると、無上の阿羅漢位に到達し、都城に住む者達に正しい法を説き始めた。

[3] マーラの出現

[3.1] マーラの布教妨害

dharmaṃ pradiśatas tasya tasyāṃ parṣadi sāmṛtam |
cakāra māraḥ pracurāṃ tāṃ tāṃ vighnaughavikriyām || 72.42 ||

dharmmam praviśatas tasya tasyāṃ parṣadi sāmṛta ○ m*
cakāra māraḥ pracurāṃ tāṃ tāṃ vighnoghavikriyāṃ ||

| dha rmma pra di sha ta sta sya ta syā ma pa rṣha di pā mri taṃ |
| tsa kā ra mā raḥ pra tsu rāṃ tā ntā mbi ghnau gha bi kri yāṃ |

42c pracurāṃ] ADZ (Ed.); pravarām E.

| 'khor der chos ni bdud rtsi dang | | bcas pa rab tu ston de la |
| bgegs tshogs rnam 'gyur rab mang ba | | de dang de ni bdud kyis byas | 72.42 |

その聴衆の中で彼が甘露をもたらす法を説いている間に[10]、マーラはあれこれ沢山の、一群の〔説法を〕邪魔するものである術現を起こした。

[10]sāmṛtaṃ dharmaṃ「甘露をもたらす法」とは比喩的な表現である。寧ろ「甘露に似た法」という意味が期待されるが、sāmṛta が「甘露に似た」という意味を表示する形容詞として使用される例は管見の及ぶ限り見出されない。では「甘露をもたらす法」が意味するのは何かということが問題となるが、これについては Mātṛceṭa (四世紀初頭以前) の *Prasādapratibhodbhava* (『信心による英知の生起』) 第 121 詩節に対する Nandipriya (西暦 700–1000 年の間) の註が参考になる。注釈は残念ながら梵本を欠くが、偈文と問題個所の註釈の蔵訳は次の通りである。テキストと頁行数は SHACKLETON BAILEY 校訂本 (Cambridge: The University Press, 1951) の該当箇所を示す。

[*Prasādapratibhodbhava* 121]
yato nimantraṇaṃ te 'bhūt saviṣaṃ sahutāśanam |
tatrābhūd abhisaṃyānaṃ sadayaṃ sāmṛtaṃ ca te ||

そこ (= 異教徒シュリーグプタの家) から、毒と火が用意されている、爾の招待があったけれども、爾は〔毒の対治として〕甘露を、〔火の対治として〕憐みを用意して、そこを訪れた。

vavarṣa mauktikaṃ tatra ruciraṃ ca sakāñcanam |
yena vyākṣiptacittānāṃ śrotṛṇām abhavad bhramaḥ || 72.43 ||

vavarṣa moktikaṃ tatra ruciraṃñ ca sakāñcanaṃ |
yena vyākṣi[4]ptacittānāṃ śrotṛṇāṃm abhavad bhramaḥ ||

| bā ba rṣha mau kti kaṃ ta tra ru tsi raṃ tsa sa kā nytsa naṃ |
| ye na bya kṣhi pta tsi ttā nāṃ sho tri ṇā ma bha ba dbha maḥ |

| nyan pa sems ni g.yeng ba rnams | | gang gis rnam par 'khrul gyur ba |
| mdzes pa gser dang bcas pa yi | | der ni mu tig char pa phab | 72.43 |

43b gis] DZ; gi PGN.

そしてその場所には、黄金混じりの光り輝く真珠の雨が降った。それのせいで心を奪われてしまった声聞達には心の動揺が起こった。

sa kṛtvāhāryasaundaryalalitaṃ nartakīvapuḥ |
nanarta sahitas tatra gandharvāpsarasāṃ ganaiḥ || 72.44 ||

sa kṛtvāhā(ryya)saundaryyalalitaṃ narttakīvapuḥ |
nanatta sahitas tatra gandharvvāpsarasāṅ gaṇaiḥ ||

| sa kri twā hā rya pau nda rya la li taṃ na rtta kā ba puḥ |
| na na rtta sa hi ta sta tra ga ndha rbbā psa ra sāṃ ga ṇaiḥ |

44a kṛtvāhārya°] AEDZ (DE JONG), confirmed by Tib. *mi 'phrogs ... byas nas*; kṛtvā hārya° Ed.
44ab saundaryalalitaṃ] AEDZ; saundaryaṃ lalitaṃ Ed.

| de yi mi 'phrogs gar mkhan ma | | mdzes sdug 'jo sgeg gzugs byas nas |
| dri za lha mo'i tshogs rnams dang | | lhan cig der ni gar dag byas | 72.44 |

44a mi 'phrogs] DZPG; nya mi 'phrogs N.

彼は〔誰も〕その美貌を奪い得ぬ、色っぽい踊り子の姿をとって、その場所で天界の楽師と天女達の一団を連れて舞を舞った。

kāntānṛttavilāsena helāpahṛtacetasām |
abhūt tatra vineyānāṃ kāmaṃ kāmamayaṃ manaḥ || 72.45 ||

[Nandipriya on *Prasādapratibhodbhava* 121 (126.32–127.1)]
... | gshegs pa zhes bya ba ni yon bdag gis mngon du yang dag par gshegs pa'o | | ji ltar zhe na | bshad pa | brtser bcas ni thugs rje dang bcas pa'o | | bdud rtsi can ni bdud rtsi can du gyur pa'o | | *bdud rtsi ni 'dir mya ngan las 'das pa thob pa'i lam ste* | mi 'chi ba'i rgyu yin pa'i phyir ro | ...

訪れること (abhisaṃyānaṃ=gshegs pa) とは招待者の所へ向かって行くことである。「どのようにしてか。」という〔問いに答えて〕言う。憐みの心を用意して (sadayaṃ=brtser bcas=snying rje dang bcas pa)。甘露を持って (sāmṛtaṃ=bdud rtsi can=bdud rtsi can du gyur pa)。この〔偈文〕での甘露 (amṛta=bdud rtsi) とは涅槃に至る道のことであり、〔それは〕不死の因であるからである。

この説明を考慮すると「甘露をもたらす法」とは「涅槃に至る道をその本質とする法」と換言することが出来るのではないか。別の解釈の可能性もあろうが、Nandipriya 註の説明を根拠に「甘露をもたらす法」の訳を充てる。

kāntānṛttavilāsena helāpahṛtacetasāṃ |
abhūt tatra [5] vineyānāṅ kāmaṅ kāmamayam manaḥ ||

| kā ntā nri tta bi lā se na he lā pa kri ta tse ta sāṃ |
| a bhū tta tra bi ne yā nāṃ kā maṃ kā ma ma ya mma naḥ |

45a °nṛtta°] AEDZ (DE JONG); °nṛtya° Ed.

| mdzes pa'i gar dang rol rtsed kyis | | bde blag tu ni sems phrogs pa |
| gdul bya rnams kyi yid ni der | | nges par 'dod pa'i rang bzhin gyur | 72.45 |

45d gyur] DZ; du PGN.

愛らしい女の踊りの艶やかな仕草のせいで[11]、注意をそらされ[12]、その場所にいた訓導さるべき者達の心は実に愛欲でいっぱいになってしまった[13]。

[3.2] マーラに死骸を結び付けるウパグプタ

avinītatarasyātha mārasya vinayodyataḥ |
acintayad vikārārhām upaguptaḥ pratikriyām || 72.46 ||

avinītatarasyātha mārasya vinayodyataḥ |
acintayad vikārārhām upaguptaḥ pratikriyāṃ ||

| a bi nī ta ta sya tha mā ra sya [474a1] | bi na yo dya taḥ |
| a tsi nta ya dbi kā rā rhā mu pa gu ptaḥ pra ti kri yāṃ |

---

[11]a 句冒頭部については、DE JONG が指摘するように、梵文写本及び梵文音写には kāntānṛtta° とある。従ってこの読みを本来の読みとして採用すべきであろう。

[12]文字通りには「不注意な状態へと心が奪い去られてしまった〔訓導されるべき者達〕」である。

[13]cd 句は d 句冒頭の kāmaṃに意味の違いを読み込ませるか否かで二つの解釈が可能である。第一解釈は意味の違いを読み込ませるもので、cd 句全体を一文として「その場所にいた教導されるべき者達の心は、実に愛欲でいっぱいになった」と解釈するものである。第二解釈は意味の違いを読み込ませず、abhūt tatra vineyānāṃ kāmaṃまでを一文と見做し、cd 句を「その場所にいた教導されるべき者達には愛欲が生じた。〔彼らの〕心は愛欲でいっぱいであった。」と解釈するものである。しかし Ksemendra が意図するのは第一解釈であろう。その根拠として二点が挙げられる。すなわち、

- 第二解釈をとる場合、意味の切れ目が d 句内部に入ることになる。
- 第一解釈をとる場合、kāma に異なる意味を持たせることが可能となり、〈同音反復〉(yamaka) を成立させることが出来る。

Kṣemendra に先んずるカシミールの詩論家 Rudraṭa (九世紀後半) は *Kāvyālaṃkāra* (『詩の装飾』) で〈同音反復〉の全般的定義を次のように提示する (テキストと詩節番号は Kāvyamālā 叢書 (Bombay: NSP, 1886) のものに従う)。

[*Kāvyālaṃkāra* 3.1]
tulyaśrutikramāṇām
anyārthānāṃ mithas tu varṇānām |
punarāvṛttir yamakaṃ
prāyaś chandāṃsi viṣayo 'sya ||

音を同じくし、且つ順序を同じくし、且つ互いに意味を異にする音素群の反復が〈同音反復〉(yamaka) である。これが用いられる領域は主に韻文である。

尤も Rudraṭa が挙げる「互いに意味を異にする」条件を守らない〈疑似同音反復〉(pseudo-yamaka) も叙事詩や Kālidāsa 以前のカーヴィアには認められるが、異なる意味を読み取ることが出来る以上、Kṣemendra が〈疑似同音反復〉を意図的に用いたとも考えられないので、第一解釈を採った。

| de nas rnam par ma dul ba'i | | bdud ni 'dul ba la brtson pa'i |
| nyer sbas kyis ni rnam 'gyur la | | 'os pa'i phyir bcos rab ru bsams | 72.46 |

46a rnam] DZGN; rnams P. **46b** brtson pa'i] PGN; brtson pa DZ.

そこで、行状下劣極まりないマーラを訓導しようとして、ウパグプタは〔マーラの〕変化〔に抗する〕に足る対抗策を考えた。

so 'bhyetya māram avadat tuṣṭo 'haṃ tava kauśalāt |
aho nṛttam aho gītaṃ divyam eva kim ucyate || 72.47 ||

so <'>bhyetya māram avadat tuṣṭo <'>haṃ tava kauśalāt* |
aho nṛttam [293b1] aho gītaṃ divyam eva kim ucyate ||

| so <'>bhye tya mā ra ma ba da ttu ṣṭo <'>haṃ ta ba kau sha lā t |
| a ho nri tta ma ho gī taṃ di bya me ba ki mu tsya te |

47c nṛttam] AEDZ (DE JONG); nṛtyam Ed.

| bdud la phyogs te des smras pa | khyod ni mkhas pas bdag tshim ste |
| kye ma gar dang kye ma glu | | mchog nyid kho na ci zhig brjod | 72.47 |

47b mkhas pas] DZ; mkhas pa PGN.

彼はマーラに近付いて言った。「私は爾が気に入った。〔技芸の〕巧みさ故に。あぁ踊りの、あぁ歌の実に神々しきことよ。〔それらを〕何と言い表せようか。」

uktveti mālāvyājena babandhāsya śavatrayam |
mastake sarpakuṇapaṃ karṇe ca śvamanuṣyayoḥ || 72.48 ||

uktveti mālāvyājena babandhāsya śavatrayaṃ |
mastake sarppakuṇapaṃ karṇṇe ca śvamanuṣyayoḥ ||

| u ktwe ti mā lā byā dze na ba ba ndha sya sha ba tra yaṃ |
| ma sta ke sa rppa ku ṇa paṃ ka ṇthe tsa shwa ma nu ṣhya yoḥ |

48d karṇe] AE; kaṇthe DZ, Tib. has *mgrin par* (*kaṇthe).

| ces brjod 'phreng ba'i zol gyis ni | | ro ni gsum dag de la btags |
| mgo la sbrul gyi ro dang ni | | mgrin par mi dang khyi yi ro | 72.48 |

48b btags] DZ; brtags PGN. **48d** yi ro] PGN; yi'o DZ.

かく述べて、花環と見せ掛けて三つの死骸、つまり、蛇の死骸をこの者の頭に、犬と人間の〔死骸をこの者の〕耳に結び付けた[14]。

[14]チベット系伝承は karṇe「耳」に当たる箇所を kaṇthe (Tib. mgrin par)「首」とする。

[3.3] 神々に救済を乞うマーラ

svayaṃ moktum aśakto 'sau māras tatkuṇapatrayam |
prayayau śaraṇaṃ devān sendropendracaturmukhān || 72.49 ||

svayaṃ moktum aśa[2]kto <'>sau māras tatkuṇapatrayaṃ |
prayayau śaraṇaṃ devān* sendropendracaturmākhān* ||

| swa yaṃ mo ktu ma sha kto <'>sau mā ra sta tku ṇa pa tra yaṃ |
| pra ya yau sha ra ṇaṃ de bā n se ndro pe ndra tsa tu rmmu khā n |

49d sendra°] ADZ (Ed.); saindra° E.

| bdud des ro ni gsum po de | | rang gis dgrol bar ma nus nas |
| dbang po nye dbang gdong bzhi dang | | bcas pa'i lha la skyabs su song | 72.49 |

49a bdud] ZPGN; 'dud D. **49b** gis dgrol] Z; gis sgrol D; gi dgrol PGN.

かのマーラはその三つの死骸を自分では外すことが出来なかったので、インドラ神、ヴィシュヌ神、四つの顔を持つ梵天を含む神々に助けを求めた。

teṣu moktum aśakteṣu preritaḥ padmajanmanā |
bhagnadarpo 'tha kandarpas tam eva śaraṇam yayau || 72.50 ||

teṣu moktum aśakteṣu preritaḥ padmajanmanā |
bhagnadarppo <'>tha kandarppas tan eva śaraṇaṃ yayau ||

| te ṣhu mo kta ma sha kte ṣhu pre ri taḥ pa dma dza nma nā |
| bha gna da rppo <'>tha ka rnda rppa sta me ba sha ra ṇaṃ ya yau |

| des kyang dgrol bar ma nus tshe | | pa dma skyes kyis rab bskul te |
| de nas dregs pa nyams pa'i bdud | | de nyid la ni skyabs su song | 72.50 |

50c dregs] DZ; dreg PGN.

彼等は外すことが出来なかったので、蓮華から生じた者 (= 梵天) に促され、蔑まれる慢心を抱く者 (= マーラ) は慢心を砕かれて、次に同じ者 (= ウパグプタ) に助けを求めた。

[3.4] マーラの降伏

sa nipatyātivinayād upaguptasya pādayoḥ |
prasādya madam utsṛjya tam uvāca kṛtāñjaliḥ || 72.51 ||

sa [3] nipatyātivinayād upaguptasya pādayoḥ |
prasādya madam utsṛjya tam uvā ○ ca kṛtāñjaliḥ ||

| sā na pa tyā ti bi na yā du pa gu pta sya pā da yoḥ |
| pra pā dya ma da mri tsra dzya ta mu bā tsa kri tā nydza liḥ |

| shin tu dul bas nyer sbas kyi | | rkang pa dag la des gtugs te |
| rgyags pa btang nas rab dang bas | | thal sbyar de la rab smras pa | 72.51 |

51a kyi] DPGN; kyis Z.

彼は非常に謙虚にウパグプタの両足に跪き、機嫌をとって、驕りの心を捨て、合掌して彼に言った。

kṛtaṃ kṛtāparādhasya tvayā yad ucitaṃ mama |
prasīda tyajyatāṃ manyur adhunāhaṃ tvadāśrayaḥ || 72.52 ||

kṛtaḥ kṛtāparādhasya tvayā yad ucitaṃ mama |
prasīda tyajyatāṃ manyur adhunāhaṃ tvadāśrayaḥ ||

| kri taḥ kri tā pa rā dha sya twa yā ta du tsi ta mma ma |
| pra sī da tya dzya tā mma ṇyu ra dhyu nā haṃ twa dā shra yaḥ |

52a kṛtāparādhasya] ADZ (DE JONG); kṛtāpakārasya E (Ed.). **52b** yad] AE (Ed.); tad DZ.

| gnod pa byas pa bdag la ni | | yang dag 'os pa khyod kyis byas |
| da ni khyod la bdag brten pas | | khro ba thong la bka' drin mdzod | 72.52 |

爾がなしたことは危害を加えた私〔が受ける〕に相応しいことなのですから[15]、心を鎮め下さい。怒りをお捨て下さい。今や私は爾を身の寄せ場とする者となったのです。

ahaṃ kṛtāparādho 'pi sugatena mahātmanā |
avinītataraḥ sūnur janakeneva rakṣitaḥ || 72.53 ||

ahaṃ kṛtāparādho <'>pi sugatena mahātmanā |
avinītataraḥ sūnur jjanake(ne)va rakṣitaḥ |

| a haṃ kri tā pa rā dho <'>pi su ga te na ma hā [474b1] tma nāṃ |
| a bi nī ta ta raḥ sū nu rdza na ke ne ba ra kṣhi taḥ |

| bdag gis gnod pa byas mod kyang | | bde gshegs bdag nyid chen po yis |
| bu ni rnam par ma dul ba | | pha yis bzhin du rab tu bsrungs | 72.53 |

53c dul] DZ; thul PGN. **53d** yis] DZ; yi PGN.

私は〔世尊に〕危害を加えたけれども、精神の偉大な善逝は〔私を〕少しも訓導なさらなかった。丁度父親が子供を守るようには。

bodhimūle mayā tasya vajrāsanajuṣaḥ purā |
kṛtā nikāranikarāḥ kṣāntam eva ca tena me || 72.54 ||

bodhimūle mayā tasya vajrāsanajuṣaḥ purā |
kṛtā nikāranikarāḥ kṣāntam eva ca tena me ||

| bo dhi mū le ma yā ta sya ba dzrā sa na dzu ṣhaḥ pu ra |
| kri tā ni kā ra ni ka rāḥ kṣhā nti me ba tsa te na me |

[15]ab 句の解釈はネパール系伝承とチベット系伝承とで異なる。前者は ab 句を yad に率いられる関係代名詞構文として「爾がなしたことは危害を加えた私には〔受けるに〕相応しいことなのですから」と解釈する。これに対し梵文音写は yad に相当する語を tad、Tib. は yang dag (*sam°) とする。これに従うと解釈はそれぞれ「爾がなしたそのことは、危害を加えた私には〔受けるに〕相応しいことである」、「危害を加えた私に相応しいのは、爾がなしたことである」となる。梵文音写の解釈には問題あるまいが、Tib. の解釈をとると cd 句との脈絡がなくなってしまう。ここではネパール系伝承に従う。

| byang chub snying por rdo rje'i gdan | | bsten pa de la bdag gis sngon |
| gnod pa yi ni tshogs dag byas | | de yis bdag la bzod pa nyid | 72.54 |

54b bsten] ZPGN; bstan D. || gis] DZ; gi PGN. **54c** yi] DPGN; yis Z.

嘗て菩提樹の根元で彼が金剛座を組んでいた時、私は危害という危害を加えたが、彼は私を実に寛恕して呉れた。

nānākāravikārakāriṇi mayi prākāratāṃ bibhratā
tasmin bodhisamādhisiddhibhavane paryaṅkabandhasthitau |
kṣāntikṣālitamanyunā bhagavatā buddhena śuddhātmanā
tena dhyānaparāyaṇena na manāg unmīlitaṃ locanam || 72.55 ||

nā[5]nākāravikārakāriṇi mayi prākāratāṃ bibhratā
tasmin bodhisamādhisiddhibhavane paryaṅkabandhasthitau |
kṣāntikṣālitamanyunā bhagavatā buddhena śuddhātmanā
tena dhyānaparāyaṇena na mā[293b1]nāg unmīlitaṃ locanaṃ ||

| nā nā kā ra bi kā ra ka ri ṇi ma yi prā kā ra tāṃ bi bhra tā
ta smi nbo dhi sa mā dhi si ddhi bha ba ne pa ryaṃ ka ba ndha sthi tau |
| kṣhā nti kṣhā li ta ma nyu nā bha ga ba tā bu ddhe na shu ddhā tma nā
te na dhyā na pa rā ya ṇe nā nā ma nā gu nmī laṃ taṃ lo tsa naṃ |

55a °vikārakāriṇi] AE (DE JONG), confirmed by Tib. *rnam 'gyur ... byed pa*; °nikārakāriṇi Ed.; vikārakariṇi DZ.

| byang chub ting 'dzin bsgrub pa'i gnas der skyil krung dag ni bcas nas gnas pa'i tshe |
| rnam 'gyur rnam pa sna tshogs byed pa bdag la ra ba nyid ni 'dzin byed cing |
| khro ba bzod pas bkrus pa'i sangs rgyas bcom ldan dag pa nyid kyi bdag nyid can |
| bsam gtan mchog tu skyong bar byed pa de yi spyan yang cung zad phye ma yin | 72.55 |

55a bsgrub] PGN; grub DZ.|| ni] DZ; nas PGN. **55d** yi] DZ; yis PGN.

菩提を得る為の三昧を成し遂げる場所で彼 (= 仏世尊) が結跏趺坐の状態にあった時[16]、種々の姿を用いて変化をなした私の側で、精神清浄なるかの仏世尊は周壁となっ

[16]文字通りの訳は「結跏趺坐という状態を有する〔彼〕」である。

て[17]、忍耐の心で怒りを払拭し、禅定に全てを捧げ、決して眼を開かなかった[18]。

bhavatā tv adya karuṇām utsṛjyāhaṃ khalīkṛtaḥ |
sāparādhe 'pi mahatāṃ na manyumalinaṃ manaḥ || 72.56 ||

bhavatā tv adya karuṇām utsṛjyāhaṃ khālīkṛtaḥ |
sāparādhe <'>pi mahatāṃ na manyumalinam manaḥ ||

| bha ba tā twa dya ka ru ṇa mu tpri dzyā haṃ kha lī kri taḥ |
| sā pa rā dhe <'>pi ma ha tāṃ na ma nyu ma li na mma naḥ |

| khyod kyis snying rje btang nas ding | | bdag ni rab tu smad par byas |
| gnod byed la yang chen po yi | | yid ni khro ba'i dri ldan min | 72.56 |

56a kyis] DZ; kyi PGN. **56c** yi] PGN; yis DZ.

しかし今貴方様は慈悲の心を御捨てになり、私を苛めなさる。偉大な人というものは過失ある者に対しても憤怒で汚れた心を抱いたりはしないのに。

muñca me kuṇapābandhaṃ sthito 'haṃ tava śāsane |
iti bruvāṇaṃ praṇayād upaguptas tam abhyadhāt || 72.57 ||

[17]prākāratāṃ bibhratā「周壁となった」という比喩的な表現の意味する所が明確でないが、これについては *Prasādapratibhodbhava* 第 107 詩節に対する Nandipriya 註が参考になろう。

[*Prasādapratibhodbhava* 107]
svakāryanirapekṣāṇāṃ viruddhānām ivātmanām |
tvaṃ prapātataṭasthānāṃ prākāratvam upāgataḥ ||
恰も己に敵意を抱いているかのような、〔善根を始めとする〕己が目的とすべきものを顧慮しない、〔悪趣という〕断崖の縁にいる者達にとっての壁と爾はなった。

[Nandipriya on *Prasādapratibhodbhava* 107 (115.25–32)]
| g.yang sa'i mu na gnas pa rnams la zhes bya la g.yang sa ni ngan 'gror 'gro ba'o | | g.yang sa de'i mu na gnas pa'i sdig pa'i las so | | de la gnas pa ni sor mo'i phreng ba dang dpal sbas la sogs pa gang yin pa de ni g.yang sa'i mu na gnas pa ste | ngan 'gror 'gro ba'i las byed pa'o | | de rnams la ra ba lta bur gyur pa ni ji ltar kha cig la g.yang sa'i mu la mngon du gyur pa'i ra bas 'dzin par bya ba'i phyir nus pa dang ldan par gyur pa de bzhin du | *khyod kyang de rnams la bya ba ma yin pa bsal ba'i phyir ra ba lta bur gyur pa zhes ba'o* |
断崖の縁にいる者達 (g.yang sa'i mu na gnas pa rnams la = prapātataṭasthānāṃ) とは、断崖つまり悪趣に赴く者のことである。その断崖の縁にいる、悪業を犯す者のことである。そこ (= 悪趣という断崖) の縁にいる者とは、アングリーマーラやシュリーグプタを筆頭とする者であって、その者は断崖の縁にいて、悪趣へと赴く行為をなす。彼等にとって壁の如くとなる (ra ba lta bur gyur pa = prākāratvam upāgataḥ) とは、丁度或る所で断崖の縁目掛けて行く人にとっては、壁は〔彼を〕捕える者となるので、〔その壁が〕力ある者となるように、爾 (khyod = tvaṃ) も彼等がなすべからざることを遠ざけてやるので、壁の如くとなるという〔意味〕である。

Nandipriya 註の最後の一文 bya ba ma yin pa bsal ba'i phyir ra ba lta bur gyur pa (*akaraṇīyāpahāritvāt prakāratvam upagataḥ)「なすべからざることを遠ざけてやるので、〔爾仏世尊は〕壁の如くとなる」を考慮すると、当該詩節の prākāratāṃ bibhratā が意味する所は「自らの禅定を妨げるものを排除する者となって」ということではないか。

[18]ab 句の解釈が難しいが、a 句の mayi と b 句の bodhisamādhisiddhibhavane を場所を表す処格に、b 句の tasmin と paryaṅkabandhasthitau をそれぞれ主語相当部、述語相当部とする絶対処格に解すのではないか。「菩提を得る為の三昧を成し遂げる場所で、彼が結跏趺坐の状態にあった時、目は私の側で彼によって決して開かれなかった。」というのが構文の基本構造であろう。

muñca mme kuṇapābandhaṃ sthito <'>haṃ tava śāsane |
iti bruvāṇaṃ praṇayād upagupta[2]s tam abhyadhāt* ||

| mu nytsa me ku ṇa pā ba ndhaṃ sthi to <'>haṃ ta ba shā sa ne |
| i ti bru bā naṃ bi na yā du pa gu pta sta ma nya dhā t |

57a muñca me] ADZ (Ed.); muñcemaṃ E. **57c** praṇayād] AE (Ed.); vinayād DZ, Tib. has *dul bas* (*vinayād).

| bdag la ro dag btags pa thong | | khyod kyi bka' la bdag gnas so |
| dul bas de skad smra byed pa | | de la nyer sbas kyis smras pa | 72.57 |

57a thong] DZ; mthong PGN.

私の死骸の束縛を解いて下さい。私は爾の命令に従います。」と語る彼にウパグプタは親愛の情を感じて述べた[19]。

[3.5] マーラに仏陀の色身を示すよう懇願するウパグプタ

na kariṣyasi ced evaṃ bhikṣūṇāṃ viplavaṃ punaḥ |
tad etat tava muñcāmi dṛḍhaṃ kuṇapabandhanam || 72.58 ||

na kariṣyasi ced evaṃ bhikṣuṇāṃ viplavas punaḥ |
tad etat tava muñcāmi dṛḍhaṃ kuṇapabandhanam* ||

| na ka ri ṣhya pi tse de baṃ bhi kṣhu ṇāṃ bi sla ba pu naḥ |
| ta de ba ta ba mu nytsā mi dri ḍhaṃ ku ṇa pa ba ndha naṃ |

| gal te slar yang nyer 'tshe khyod | | dge slong rnams la mi byed na |
| khyod la brtan par bcings pa yi | | ro 'di dag ni bdag gis dgrol | 72.58 |

58c bcings] PGN; 'chings DZ. || yi] DZPN; yis G.

「もし二度とかく比丘達を惑乱させることがないなら、この堅く結わえ付けられた死骸の束縛を爾から解いてやろう。

idaṃ ca bhavatā kāryaṃ priyaṃ praṇayino mama |
atītasugatākāraṃ saṃdarśayitum arhasi || 72.59 ||

idañ ca bhavatā kāryaṃ priyaṃ praṇayiṇo mama |
atītasugatākāraṃ saṃdarśayitum a[3]rhasi ||

| i daṃ tsa bha ba tā kā ryaṃ pri yaṃ pra | [475a1] ṇa yi no ma ma |
| a tī ta su ga tā kā raṃ sa nda rsha yi tu ma rha si |

| gus ldan bdag la dga' ba ni | | 'di yang khyod kyis rab tu bya |
| 'das pa'i bde gshegs rnam pa ni | | khyod kyis yang dag bstan par 'os | 72.59 |

59c rnam pa DZPN; rnams pa G.

[19] c 句の praṇayād に相当する語をチベット系伝承は vinayād (Tib. dul bas)「従順さ故に」とする。

そして親愛を抱く私が喜ぶ次のことを貴方はなせ。過去の善逝の姿を見せてはくれないか。

dṛṣṭā tava mayā śaktir nāṭye sarvānukāriṇaḥ |
saṃdarśane bhagavataḥ param utkaṇṭhito hy aham || 72.60 ||

dṛṣṭā tava mayā śaktir nnāṭye sarvvānukāriṇaḥ |
sandarśanena bhavaga ○ vataḥ param utkaṇṭhito hy ahaṃ ||

| dri ṣhṭa ta ba ma yā sha kti rnā ṭye sa rbbā nu kā ri ṇaḥ |
| sa nda rṣha ne bha ga ba taḥ pa ra mu tka ṇṭhi to hya haṃ |

| kun gyi rjes mthun khyod kyis ni | | zlos gar nus pa bdag gis mthong |
| bcom ldan 'das ni mthong ba dag | bdag ni mchog tu 'dod par gyur | 72.60 |

爾はあらゆるものを模倣するが、踊っている時、私は〔爾の〕能力をありありと目にした。私は実に世尊を目にすることをこの上なく切望しているのだ。

dharmakāyo mayā dṛṣṭaḥ sugatasya śrutātmanā |
rūpakāyas tu naivāsau nayanāmṛtanirbharaḥ || 72.61 ||

dharmmakāyo mayā dṛṣṭaḥ sugatasya śrutātmanā |
rūpakāyas tu naivāsau nayanāmṛ[4]tanirbhāraḥ

| dha rmma kā yo ma yā dri ṣhṭaḥ su ga ta syā shru tā tma nā |
| rū pa kā ya stu ne bā sau na ya nā mri tā ni rbha raḥ |

| bde gshegs kyi ni chos kyi sku | | thos pa'i bdag nyid bdag gis mthong |
| nges par mig gi bdud rtsi'i rgyun | | gzugs kyi sku de ma yin no | 72.61 |

61d de] DZ; ni PGN.

私は学識を自分のものにしているので、善逝の法身を見たことはあるが、眼にとっての甘露に満たされた、かの色身〔を見たこと〕は全くない。」

[4] 仏陀の色身を示すマーラ

[4.1] ウパグプタの懇願を聞き入れるマーラ

iti nirmuktakuṇapas tenoktaḥ kusumāyudhaḥ |
tam ūce saugataṃ rūpaṃ tulyaṃ kartuṃ na śakyate || 72.62 ||

iti nirmmuktakuṇapas tenoktaḥ kusumāyudhaḥ |
tam ūce saugataṃ rūpaṃ tulyaṃ kartuṃ na śakyate ||

| i ti ni rmu ktā ku ṇa sa ste no ktaḥ ku su mā yu dhaḥ |
| ta mū rtse sau ga ta rū paṃ tu lyaṃ ka rttuṃ na shā kya te |

| zhes brjod de yi ro dag ni | | bkrol ba me tog mtshon can gyis |
| de la smras pa bde gshegs kyi | | gzugs dang mtshungs par byed mi nus | 72.62 |

かく彼に言われ、死骸を外して貫うと、花の武器を持つ者(= マーラ) は彼に言った。「善逝の姿を〔生前と〕同じように蘇らせることは出来ません[20]。

tathāpi darśayāmy eṣa tvadājñāvinaye sthitaḥ |
praṇamyena praṇamyo 'haṃ na tvayā sugatākṛtiḥ || 72.63 ||

tathāpi darśayā....tvadājñāvinaye sthitaḥ |
praṇāmyena praṇamyo <'>haṃ na [5] tvayā sugatākṛtiḥ ||

| ta thā pi da rṣha ya mye ṣha twa dā dznyā bi na ye sthi taḥ |
| pra ṇa mye na pra ṇa myo <'>haṃ na twa yā su ga tā kri tiḥ |

| de lta na yang khyod kyi bka' | | 'dul ba la gnas bdag gis bstan |
| khyod kyis bdag ni bge gshegs dbyibs | | phyag 'os la yang phyag mi bya | 72.63 |

63c kyis] DZ; kyi PGN.

しかし、爾の命令と訓導に従う者となった以上、この〔私は善逝の色身を〕御覧に入れましょう[21]。爾は平伏されるべき方です。私が善逝の姿をとろうとも、〔爾は私に〕平伏なされぬよう。」

[4.2] 仏陀の色身を示すマーラ

ity uktvā sugatākāram avikārasukhapradam |
sa samutsṛṣṭakanakālokaṃ kāntam adarśayat || 72.64 ||

ity uktvā sugatākāraṃ avikārasukhapradaṃ |
sa samutsṛṣṭakanakālokaṃ kāntam adarśayat* ||

| i tyu ktwā su ga tā kā raṃ sa rbba kā ra su kha pra daṃ |
| sa sa u tpri ṣhṭa ka na kā lo kaṃ kā nta ma da rṣha yat |

64b avikāra°] AE (Ed.); sarvakāra° DZ, Tib. has *rnam pa kun tu* (*sarvākāra°). **64d** °ālokaṃ kāntam] AEDZ; °ālokakāntam Ed.

| zhes brjod bde gshegs rnam pa ni | | rnam pa kun tu bde ster zhing |
| gser gyi snang ba rab tu spro | | mdzes pa dag ni de yis bstan | 72.64 |

64b ster] DZGN; star P.

かく述べて、彼は善逝の姿を見せた。〔それは〕不変の楽をもたらし[22]、黄金の光を放ち、美しかった。

dīrghadhyānanimīlalocanayugaṃ niḥsaṃbhramabhrūlataṃ
nāsāvaṃśaniṣaktakāntakanakacchattropamānālikam |

[20]saugataṃ rūpaṃ tulyaṃ「善逝の姿を〔生前と〕同じように」を Tib. は bde gshegs kyi gzugs dang mtshungs par「善逝の姿と等しく」と意訳する。

[21]Tib. は Skt. の eṣa に相当する訳語を欠く。

[22]ネパール系とチベット系伝承は b 句冒頭部を異にする。前者は avikārasukhapradam「不変の楽をもたらす〔善逝の姿〕」という読みを伝え、後者は sarvākārasukhapradam (Tib. rnam pa kun tu bde ster zhing)「あらゆる種類の楽をもたらす〔善逝の姿〕」という読みを伝える。

nirbhūṣāyatakarṇapāśalalitaṃ vyālambibāhudrumaṃ
bauddhaṃ rūpam avekṣya nirvṛtir abhūn niścetanānām api ‖ 72.65 ‖

dīrghadhyānanimīlalocanayugan nisambhrama[294a1]bhrūlataṃ
nāśāvaṃśaniṣaktakāntakanakacchatropamānālikaṃ ।
nirbhūṣāyatakarṇapāśalalitaṃ vyālambibāhudrumaṃ
bauddhaṃ rūpam avekṣya nivṛtir abhūn niścetanānām api ‖

। dī rgha dhyā na ni lī na lo tsa na yu gaṃ niḥ saṃ bhra ma bhrū la taṃ
na sā baṃ sha ni sa kta kā nta ka na ka tstsha tro pa mā nā li kaṃ ।
। [475b1] ni rbhu shā ya ta ka rṇṇa pā sha la li tāṃ byā la mba bā hu dru maṃ
bau ddhaṃ rū pa ma pe kṣhya ni rbri ti ra bhu nni shtse ta nā nā ma pi ।

65b °upamānālikam] AEDZ (Ed.), Tib. has *mtshungs pa'i mtshan ma can* (*°upamānaliṅgam).

। spyan ni zung dag ring zhing bsam gtan la chags smin ma'i 'khri shing rnam 'gyur bral ।
। shangs kyi rgyud ni mdzes par chags shing gser gyi gdugs dang mtshungs pa'i mtshan ma can ।
। rgyan med snyan gyi zhags pa ring zhing mdzes la phyag gi ljon pa kun tu 'phyang ।
। sangs rgyas kyi ni gzugs dag mthong nas bsam pa med pa rnams kyang dga' bar gyur । 72.65 ।

65d nas] PGN; na DZ.

長い間禅定に入ることで両眼を閉じ[23]、蔓草のような眉毛は微動だにせず、鼻背に美しい黄金色を備え、額は日傘のようであり[24]、飾りを付けていないにも拘わらず、結

[23]°nimīla° という語形は何故か用例に乏しい。「〔花瓣等が〕閉じた」という所有複合語の前分で通常用いられるのは nimīlita° もしくは nimīli° という形である。nimīla° が所有複合語の前分で用いられる用例を探すと、Śrīharṣa (12 世紀) の *Naiṣadhīyacarita* (『ニシャダ王の事績』) 第 11 章 11 詩節に見られる。詩節番号と頁数はボンベイ本 (Bombay: NSP, 1894) の該当箇所を指す。

[*Naiṣadhīyacarita* 11.11]
vaktrendusaṃnidhinimīladalāravinda-
dvaṃdvabhramakṣamam athāñjalim ātmamaulau ।
kṛtvāparādhabhayacañcalam īkṣamāṇā
sānyatra gantum amaraiḥ kṛpayānvamāni ‖

〔サラスヴァティーの言葉の〕後、自分の冠の側で合掌し、過失への恐怖に怯えながら〔自分達を〕見つめる彼女 (= ダマヤンティー) が別の場所に行くことを憐みの気持ちから神々は許した。〔彼女が合わせた掌は〕月のような顔の近くにあるせいで花瓣を閉じている一対の睡蓮華だと錯誤させ得るものであった。

詩節中の vaktrendusaṃnidhinimīladalāravindadvaṃdvabhramakṣamam という複合語を Nārāyaṇa 註 (451.8–9) は vaktrendor mukhacandrasya saṃnidhiḥ tasmān nimīlāni saṃkucanti dalāni parṇāni yasya tad aravindadvaṃdvaṃ tasya bhrame kṣaṃaṃ samartham「月のような顔 (vaktrendor=mukhacandrasya) の近くにあるので、花瓣 (dalāni=parṇāni) が閉じている (nimīlāni=saṃkucanti) 一対の睡蓮華と錯誤することを可能にする (kṣamaṃ=samartham)〔合掌〕」と分析し、Pāṇini 3.1.134: nandigrahipacādibhyo lyuṇinyacaḥを根拠に nimīla という語形を動詞語根 ni√mīl の後に行為主体を表示する kṛt 接辞 aC が導入された形だと説明する。但し Nārāyaṇa は上掲詩節の異読として °nimīlidala°「花瓣が閉じる性質のある〔一対の蓮華〕」という読みも与えているので、当該詩節も本来は °nimīlilocanayugaṃという読みであったのかも知れない。ここでは *Naiṣadhīyacarita* の用例を根拠に nimīlaṃ locanayugaṃ yasya という複合語解釈をとる。尤も nimīla を行為名詞にとれば、dīrghadhyānanimīla° を dīrghadhyānena nimīlo yasya「長い間禅定に入っているので閉じている〔両眼〕」という所有複合語と見做し、更にそれを °locanayuga を後分とする所有複合語の前分として「両眼が、長い間禅定に入っているので閉じている〔姿〕」と解釈することも理論上可能であろう。尚、この箇所に対応する Tib. spyan ni zung dag ring zhing bsam gtan ka chags「両眼は切れ長であり、禅定に集中しており」は当該個所を正確に解釈した訳とは考えられない。

[24]b 句の解釈が難しいが、詩脚第 12 音節に中間休止が入ることを考慮に入れると、

わえ縄のような長い耳は魅力に溢れ、樹のような腕が垂れ下がった仏陀の姿を見て、意識のないものにまで歓喜が生じた[25]。

[4.3] 仏陀の色身に敬礼するウパグプタ

upaguptas tad ālokya kāntaṃ bhagavato vapuḥ |
sabāṣpapulakākīrṇaś cakre tatpādavandanam || 72.66 ||

..paguptas tadālo[2]kya kāntan bhagavato vapuḥ |
sabāṣpapulakākīrṇaś cakre tatpādavandanam* ||

| u pa gu pta sta dā lo kya kā nta bha ga ba to ba puḥ |
| sa bā ṣhpa pu la kā kī rṇṇa shtsa kre ta tpā da ba nda naṃ |

| bcom ldan sku ni mdzes pa de | | mthong nas nyer sbas mchi ma dang |
| bcas shing spu long rgyas pa yis | | de yi zhabs la phyag dag byas | 72.66 |

ウパグプタは世尊のその美しい姿を見て、涙を浮かべ、全身の毛が逆立ち、彼の足に敬礼した。

---

nāsāvaṃśaniṣaktakāntakanaka° (nāsāvaṃśe niṣaktaṃ kāntakanakam yasya) と chattropamānālika° (chattropamāno 'liko yasya) という二つの所有複合語から成る、d 句の rūpam に掛かる同格限定複合語と解すことが出来よう。尚、ネパール系伝承と梵文音写は中間休止部以降を等しく °cchattropamānālikam「その額は日傘のようであり」とする。一方対応する Tib. は gdugs dang mtshungs pa'i mtshan ma can とあり、*°cchatropamānaliṅgam「その印は日傘のようであり」という Skt. が想定される。LC Suppl. は当該個所を典拠として mtshan ma can の訳語にālika を充てるが、この処置は適切ではあるまい。

[25] 当該詩節が Av-klp 第 93 章 Sumāgadhā 第 25 詩節と頻繁に字句が一致することは先に指摘した通りである (山崎、前掲論文、pp. 68–69)。しかし多音節の詩節を用いて主要人物の顔とその周辺部を描写する同種の技法は Kṣemendra に固有なものではなく、ベナレスの宮廷詩人 Rājaśekhara (9–10 世紀) が愛好したことは夙に知られる通りである。以下に彼の戯曲 *Bālarāmāyaṇa* (『幼児の為のラーマーヤナ』) における類例を二つ挙げておく。テキストと詩節番号はベナレス本 (Ed. by GOVINDADEVA ŚĀSTRI, Benares: The Medical Hall Press, 1869) に従う。

[*Bālarāmāyaṇa* 3.24]
dhammillo lalitaḥ smitaṃ śuci dṛśau dīrghe bhruvau bhaṅgure
pāśābhe śravasī viśālam alikaṃ mañjiṣṭhapṛṣṭho 'dharaḥ |
kaṇṭho rukmaruciḥ samunnatam uraḥ kāmyaṃ ca kāñcīpadaṃ
dṛgdvaṃdvāni ciraṃ vibhajya daśadhā tanmaithilīṃ paśyata ||

編まれた巻き髪は魅力的で、微笑みは無垢、両眼は切れ長、一対の眉毛は曲線を描き、両耳は結わえ縄の如く、額は広く、唇はその上半分が茜色に染まり、喉は黄金色の輝きを湛え、胸はふくよかにふくらんでいて、臀部は愛らしい。一対の眼よ、〔お前達は〕そのミティラ王の娘 (= シーター) を十の部分に分けて、長い間見ておくがよい。

[*Bālarāmāyaṇa* 6.66]
karṇābhyarṇeṣv alikaphalakeṣv āyate netratantre
nāsāvaṃśeṣv adharapuṭakeṣv aṃsavakṣaḥsthalīṣu |
yo yo bhāgaḥ surapatiripoḥ svāminaḥ spaṣṭa āsīt
taṃ taṃ gṛdhrāḥ kavalakalitaṃ lūnavanto nakhāgraiḥ ||

神々の主の敵 (= ラーヴァナ) の耳の近くで、額の表面で、大きな一続きの目の側で、鼻背で、上下の唇の間で、肩と胸で〔鷲の〕長 (= ジャターユ) がありありと見た〔ラーヴァナの〕体の部位は凡そどこであれ、鷲達が爪の先で一口分摘み取った。

na na nāma praṇamyo 'ham iti vādini manmathe |
upaguptas tam avadat praṇamyas tvaṃ jināk̠rtiḥ || 72.67 ||

na na nāma praṇamyo <'>haṃ iti vādini manmathe |
upaguptam avadat praṇamyas tvaṃ jinā(k̠r)tiḥ ||

| na nā ma pra ṇa myo <'>haṃ mi ti ba di ni pa ma nma the |
| u pa gu pta sta ma ba da tpra ṇa mya stwaṃ dzi nā kri tiḥ |

67a na na nāma] AE (DE JONG); na ca nāma Ed.; na nāma DZ, Tib. has *nges par ... min* (*na nāma).

| nges par bdag ni phyag 'os min | | zhes pa yid srubs smra byed tshe |
| de la nyer sbas kyis smras pa | | rgyal ba'i rnam pa khyod phyag 'os | 72.67 |

67a ni] PGN; gi DZ.

「だ、断じて私に平伏してはなりません[26]。」と心を攪乱する者 (= マーラ) が語ると、ウパグプタは彼に言った。「勝者の姿をとっているので、爾に平伏せねばならないのだ。

k̠rtimeṣv api bimbeṣu vandyā bhagavatas tanuḥ |
na sa mr̠tkāṣṭhadhātūnāṃ praṇāmaḥ kriyate budhaiḥ || 72.68 ||

k̠rttimeṣv api [3] bimbeṣu vandyā bhagavatas tanuḥ |
na sa mr̠tkāṣṭhadhātūnām praṇāmaḥ kriya ○ te budhaiḥ ||

| kri tri me shwa pi bi mba ṣhu ba ndyā bha ga ba ta sta nuḥ |
| na sa mri tkā ṣhṭhi dhā tū nāṃ pra ṇā maḥ kri ya te bu dhaiḥ |

| bcom ldan sku ni bcos ma yi | | gzugs rnams la yang phyag byar 'os |
| mkhas pa rnams ni sa shing dang | | khams la phyag de byed pa min | 72.68 |

---

[26]a 句冒頭部の校訂本の読みは na ca nāma であるが、DE JONG は最古の写本 A に基づいてこれを na na nāma と読むよう提案する。この措置自体には問題はない。しかしこの読みに従うと a 句が「必ず私に平伏せよ」という強い肯定を表す文になり、第 63 詩節のマーラの台詞と矛盾をきたし、Tib. の解釈とも乖離する。従って別の解釈を考えねばならない。a 句がマーラの台詞であることを考慮すると、当該箇所は Bhoja (11 世紀) が言う所の〈特殊な美点〉(vaiśeṣikaguṇa) と〈模倣表現〉(anukaraṇa) を念頭に置いたものではないか。例えば Rājaśekhara の *Pracaṇḍapāṇḍava* (『激怒せるパーンドゥの王子達』) 第 52 詩節の如きが参考になろう。テキストと詩節番号は CAPPELLER 校訂本 (Strassburg: Verlag von Carl J. Trübner, 1885) のそれに従う。

[*Pracaṇḍapāṇḍava* 52]
*kiṃ kiṃ kiṃ cucucu*mbanair *mumumu*dhā vaktrāmbujasyāgrato
*dededehi pipi*priye *sususu*rāṃ pātre 'tra *rere*vati |
*mā mā mā vivi*lambanaṃ *kuru kuru* premṇā halī yācate
yasyetthaṃ madacūrṇitasya tarasā vācaḥ skhalanty ākulāḥ ||

「蓮華のような顔を目の当たりにして、い、い、意味もなく、せ、せ、接吻を交わしてな、な、何になろう。い、い、いとしいレ、レーヴァティーよ、この器にス、ス、スラー酒をそ、そ、注いでおくれ。ぐ、ぐ、ぐずぐずし、しないで。鋤を手にした者 (= バララーマ) が愛情からお願いしているのだから。」酔い潰れた彼の、このように縺れた言葉が怒涛の如くしどろもどろに出る。

上掲例から判断して、a 句で用いられている na na nāma という表現は二重否定を意図したものではなく、仏陀の姿をとった自分にウパグプタが敬礼するのを見たマーラが狼狽する様子を強調する意図で Kṣemendra が用いた〈模倣表現〉と見做すことが出来るのではないか。尚、Bhoja の詩論書における〈特殊な美点〉と〈模倣表現〉に関する議論については本田 [2006] を参照されたい。

68b rnams] DZPN; om. G.

影像というものは人為的なものであるけれども、世尊の身体は敬礼されねばならない。賢者というものは土や木切れや金属にかく頭を下げたりはしないものだ。」

ity uktam upaguptena śrutvā māraḥ prasannadhīḥ |
vihāya saugataṃ rūpaṃ svaṃ vapuḥ pratyapadyata || 72.69 ||

ity uktam upaguptena śrutvā māraḥ prasannadhīḥ |
vihāya saugataṃ rūpaṃ svaṃ vapuḥ pratyapadyata ||

| i tyu kta mu pa gu pte na shru twā mā raḥ pra sa nna dhīḥ
| bi hā ya sau ga taṃ rū paṃ swa mba puḥ pra tya ya dya ta |

| nyer sbas kyis ni 'di brjod pa | | rab dang blo ldan bdud kyis thos |
| bde gshegs gzugs ni yongs btang ste | | rang gi gzugs su rab tu bstan | 72.69 |

かくウパグプタが述べたことを聞き、己の知性が澄明を得たので、マーラは善逝の姿を捨てて自分の姿に返った。

[5] マトゥラーの住人の阿羅漢果獲得

[5.1] マトゥラーの住人を呼び集めるマーラ

tenaivātha samāhūtā vinītena hitaiṣiṇā |
upaguptāntikaṃ paurāḥ saddharmaṃ śrotum āyayuḥ || 72.70 ||

te[4]nevātha samāhū{yā} vinītena hiteṣiṇā |
upaguptāntikaṃ porāḥ saddharmmaṃ śrotum āyayuḥ ||

| te ne bā tha sa mā hū tā bi nī te na hi te ṣhi nā |
| u pa gu ptā nti kaṃ pau rāḥ ba ddha rmma shro tu ma ya yuḥ |

70ab samāhūtā] A^{pc}EDZ (Ed.); samāhūyā A^{ac}.

| de nas dul zhing phan pa 'tshol | | de yis yang dag bos pa yi |
| grong khyer pa rnams dam pa'i chos | | nyan du nyer sbas drung du 'ongs | 72.70 |

70a 'tshol] DZ; tshol PGN. **70b** bos pa yi] DZGN; bos pa yis P.

そしてまさにその者は教化されたので、他者を利益しようと欲し、都城の民を呼び出した。〔彼等は〕正しい法を聴聞しようとして、ウパグプタの近くにやって来た。

[5.2] マトゥラーの住人の阿羅漢果獲得

tasyopadeśakathayā satyadarśananirvṛtāḥ |
lakṣāṇy aṣṭādaśa prāpur arhattvaṃ puravāsinām || 72.71 ||

tasyopadeśakathayā satyadarśananivṛtāḥ |
lakṣāṇy aṣṭādaśa prāpur arhatvam pura[5]vāsinām* ||

| ta syo pa de sha ka tha yā sa tya da rṣha na ni rbri taḥ |
| la kṣhā nya ṣhṭā da sha prā pti ra rha twāṃ su ra bā si nāṃ |

| de yi man ngag gtam gyis ni || bden pa mthong zhing dga' ba yi |
| grong khyer na gnas 'bum phrag ni || bco brgyad dgra bcom nyid thob 'gyur | 72.71 |

71b yi] PGN; yis DZ. **71d** nyid thob 'gyur] DZ; nyid dag thob PGN (also correct).

彼が教示を説いたことによって〔都城の民は〕真実を見て歓喜した。一万八千の都城の住人達は阿羅漢となったのである。

[6] 帰結

iti sa sakalalokālokakalyāṇakārī
vyathitatimirahārī dharmamārgopadeśaḥ |
vipulakuśalamūlaprāptapuṇyodayānāṃ
bhavati kila maharddhir yā pareṣāṃ hitāya || 72.72 ||

iti śakalalokālokakalyāṇakārī
vyathitatimirahārī dharmmamārgopadeśaḥ |
vipulakuśalamūlaprāptapuṇyodayāṇām
bhavati kila mahārddhir yā pareṣāṃ hitāya || × ||

| i ti sa sa ka [476a1] | la lo kā lo ka ka lyā ṇa kā rī
bya dhi ta ti mi ra hā rī dha rmma mā rgo pa de shaṃ |
| bi pu la ku sha la mū la prā pta pu ṇyo da yā nāṃ
bha ba ti ki la ma ha rddhi ryaḥ pa re ṣhāṃ hi tā ya |

72a sa sakalalokāloka°] DZ (DE JONG); sakalalalokāloka Ed.; śakalalokāloka° A; sakalalokāloka° E. In d Tib. has *de* (*sa).

| de ltar 'jig rten mtha' dag dge ba dag gis snang byed cing |
| rab rib 'phrog par byed pas chos kyi lam gyi man ngag bsgrubs |
| rgya che dge ba'i rtsa bas bsod nams rgyas pa thob rnams kyis |
| rdzu 'phrul chen po gang de gzhan la phan pa'i don du 'gyur | 72.72 |

以上のその法という道の教示は、一切世界〔を照らす〕光明という善をもたらし[27]、〔生存〕苦に苛まれている者達の盲目の闇を払い除けるものであった[28]。夥しい善根に

[27]校訂本の a 句は sakalalalokāloka kalyāṇakārīであり、意味が通じない。しかしネパール系の二写本は śakalalokālokakalyāṇakārīないしは sakalalokālokakalyāṇakārīという読みを提示しており韻律に抵触する。そこで梵文音写を見ると sa sakalalokālokakalyāṇakārīとあり、DE JONG が Tib. の d 句末にある指示代名詞 de (*sa) に基づいて推定した読みに一致する。ネパール系写本は筆写段階で恐らく sa を欠落したようである。
次に詩節の解釈の問題であるが、Tib. の解釈は「一切世界を善によって照らし、盲目の闇を払い除ける者は法の道を完成する。夥しい善根で福徳を生ぜしめた者達の神通力、それは他者に利益をもたらすものとなるのである」である。従って d 句の de を rdzu 'phrul chen po (*maharddhir) を受ける指示代名詞と解したことが知られる。ところがこの場合 Skt. の a 句冒頭の sa を sā にかえねばならないことになり、韻律に抵触する。解釈が難しいが、ここでは ab 句を独立した一文、c 句以下 bhavati kila maharddhir までを yā pareṣām hitāya という複文を受ける主文として解釈する立場をとり、上記のように訳した。

[28]vyathitatimirahārīをどのように解釈するかが問題になる。チベット訳者は当該箇所に rab rib 'phrog par byed pas「盲目を払い除ける」という訳語を充て、vyathita° を訳していない。vyathita° が複合語の前分を

よって福徳を生ぜしめた人というのは、他者に利益をもたらす、偉大な神通力を備えていると言われている。

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisattvāvadānakalpalatāyām upaguptāvadānaṃ dvāsaptatitamaḥ pallavaḥ ||

iti kṣe[294b1]mendraviracitāyāṃ bodhisatvāvadānakalpalatāyām upaguptāvadānaṃ dvāsaptatimaḥ pallavaḥ ||

i ti kshe me ndra bi ra tsi tā yāṃ bo dhi sa tvā ba dā na ka lpa la tā yāṃ u pa gu ptā ba dā naṃ dwā sa pta ti ta maḥ pa lla waḥ ||

| zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi 'khri shing las nyer sbas kyi rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste bdun cu rtsa gnyis pa'o ||

以上 Kṣemendra によって著された『菩薩のアヴァダーナの如意の蔓草』中の第 72 章「ウパグプタのアヴァダーナ」了。

5 AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」編纂の歴史的背景

5.1 ヒンドゥー教との関係

議論を AAv-m 所収話に戻そう。我々が AAv-m 所収話の構成上の特徴にだけ注目した場合、PRZYLUSKI [1923: xv] による AAv-m 所収のアショーカ王伝説の評価は尤もらしく思われる。しかし AAv-m 所収話では物語の導入部、帰結部等が Divy 所収話や Av-klp 所収話に比べ大幅に敷衍されている事実にも我々は注目すべきである。当該個所は AAv-m の成立問題を繙く上で重要な示唆を我々に与える。以下に敷衍個所の幾つかを検討してみよう。

AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」が編纂される歴史的背景を知る上で興味深いのが $N_1$15a12; $T_1$27a9 以下の 11 詩節である。

ウパグプタの説法を妨害したマーラは、ウパグプタにより首に三種の屍を結び付けられる。彼は屍を外して貰おうとしてアグニ (Agni) 神、ヤマ (Yama) 神、ナイルリティヤ (Nairṛtya) 神、ヴァルナ (Varuṇa) 神、ヴァーユ (Vāyu) 神、クベーラ (Kubera) 神を始めとする諸神を訪れるが悉く失敗する。困惑したマーラは梵天に助けを求めるものの、梵天さえもウパグプタの力に及ばないことを知り、ウパグプタに降伏を申し出る。

マーラが梵天に助けを求め失敗に終わる箇所まで、AAv-m 所収話が記述する所は Divy 358.1–28 (358.3–28=*Kalpanāmaṇḍitikā* 166.40–167.30) と同じである。ところが AAv-m 所収話は $N_1$15a12; $T_1$27a9 以降で、梵天に助けを求め失敗したマーラが、ヴィシュヌとシヴァに助けを求めたことを詳細に語る。テキストに問題もあり解釈が難しい箇所であるが、以下にそれを見よう[29]。

なす場合、通常意官もしくは身体の一部を表す語を後分にとり「～を苦しめられた者」、「～を痛め付けられた者」という意味を表示する所有複合語となる。vyathitasindhu°「波立った海」といった同格限定複合語の前分として用いられる用例も存在するが、vyathita° が形容詞化して同格限定複合語の前分をなす用例は普通ではない。vyathitānāṃ timirā haratīti「〔生存〕苦に苛まれている者達の盲目の闇を払い除ける」と分析するのが自然な解釈ではないか。

[29] ここで AAv-m の写本について瞥見を加えておく。転写に用いた二写本 N_1T_1 はネワール文字で筆写された紙写本で、比較的正確に筆写されており、異読の殆どは非重要なものである。また筆者が検討する限り両者に従属関係は認められない。写本としてはこの他、完本として MITRA [1882] が AAv-m の内容紹介に用いたベンガル・アジア協会所蔵本、ZINKGRÄF [1940] が転写に用いたケンブリッジ大学図書館所蔵

[AAv-m N_1 15a12–15b4; T_1 27a9–27b7]
iti brahmasamākhyātaṃ śrutvā māraḥ sa mātsaraḥ |
kāmadhatvīśvaraṃ viṣṇuṃ rājasaṃ śaraṇaṃ yayau ||
praṇatvā caraṇāmbhoje sāśrumukhaḥ kṛtāñjaliḥ |
viṣvaksenaṃ sa madanaḥ prārthayāmāsa vihvalaḥ ||
paṅkajākṣa vibho trāhi māṃ durbalaṃ kṛpādṛśā |
*bhikṣubandhitasarpaṃ[1] me kuṇapatrayam eva ca ||
*pratimocatu ca daityāre bhavaccharaṇam āgataḥ[2] |
tenārthitam idaṃ śrutvā dṛṣṭādbhutaprabhāvakaḥ ||
sa *smito[3] madanaṃ māraṃ pratyuvāca janārdanaḥ |
dhig tvāṃ māra kimarthe hi *jagadvandye[4] ca bhikṣuke ||
apakāraṃ kṛtaṃ yena avasthā mahatī tava |
nāsya tejobalaṃ hartuṃ śakyaṃ na hi kadācana ||
khadyotakaprabhāsena *paurṇacandraprabhām[5] iva |
iti harivacaḥ śrutvā saṃtrāsavihvalāśayaḥ ||
ārūpyādhipatidevaṃ śaraṇaṃ sa yayau drutam |
kṛtāñjalir uvācainaṃ natvā gadgadavāk muhuḥ ||
hara tvaṃ hara me kāyāt kuṇapaṃ sabhujaṃgamam |
bandhitaṃ upaguptena karuṇāvarjitena ca ||
tato kṛtāntam ākarṇya krodhāruṇekṣaṇeva ca |
pratyuvāceśvaro māraṃ dhig dhig tvām iti ninditaḥ ||
*nirjātena[6] kṛtaṃ tvayā munigurau śrīśrīghaṇe *bhikṣuke[7]
pāpiṣṭhena aho 'pakāram aniśaṃ durmedhasā vandyake |
naitan me pratimocane balavato 'py āśakya evāsti hi
tasmāt tvaṃ śaraṇaṃ vrajasva *karuṇākārasya[8] tasyaiva tu ||

かく梵天が語ったことを聞いて、その邪悪なるマーラは、激越なる欲界の支配者であるヴィシュヌを身の寄せ所にした。蓮華のような両足に敬礼し、顔に涙を浮かべ、

[1] *bhikṣubandhitasarpaṃ] Ex conj.; bhikṣubandhisarpaṃ N_1; bhikṣubandhisarpa T_1.
[2] *pratimocatu ca daityāre bhavaccharaṇam āgataḥ] Ex conj.; pratimocatu yadaityārebhaccharaṇam āgataḥ N_1T_1.
[3] *smito] Ex conj.; smitā N_1T_1.
[4] *jagadvandye] Ex conj.; jagadvṛndye N_1T_1.
[5] *paurṇacandraprabhām] Ex conj.; paurṇaś candraprabhām N_1T_1.
[6] *nirjātena] Ex conj.; nirjalene N_1T_1.
[7] *bhikṣuke] Ex conj.; bhikṣuka N_1T_1.
[8] *karuṇākārasya] Ex conj.; karuṇākāra N_1T_1.

本、東大所蔵本 (MATSUNAMI Cat, #35) が、断片写本として National Archives 所蔵本 (A858/3)、東大所蔵本 (MATSUNAMI Cat, #36) が知られている。これらのうち校訂に有用と思われるのはベンガル・アジア協会所蔵本のみである。その他の写本は何れもデーヴァナーガリー文字で筆写された新しい写本で、National Archives 所蔵本と東大所蔵本を見る限りでは、誤写が夥しく、ネワール写本に比べて本来的な読みを示すことは全くない。従ってこれらの写本を校合することはしなかった。転写においては次のような異読は逐一取り上げなかった。(1) アヌスヴァーラ記号の欠落及び不必要な挿入、(2) 句読点として用いられるヴィサルガ記号の有無、(3) その他正書法による異読。但し韻律の都合上代用アヌスヴァーラが用いられている場合は、写本に記されている通り転写した。テキスト中には古典梵語文法や韻律に関する規定から逸脱する箇所が頻繁に見られるが、叙事詩や仏教経典類の用例に照らして一般的と思われるものについては、これを逐一説明していない。

合掌し、その愛欲の神は苦しめられて、至る所に軍勢を保有する者 (= ヴィシュヌ) に請うた。

「蓮瓣のような目をした御方よ、憐みの眼差しからその御方だと知られる権力者よ、比丘によって蛇を結び付けられてしまった[30]、非力なる私を守り給え。そして私から三つの屍を外されよ。悪魔の敵よ、〔私は〕貴方という身の寄せ場にやって来たのです[31]。」

彼が求めたこのことを聞き、強力なる、かの人を煽り立てる者は驚愕すべき様を見、微笑を浮かべて愛欲の神マーラに返答した。

「マーラよ、爾の何と愚かなことよ。一体何故、衆生が崇敬すべき比丘に対して危害を加えたのか。そのせいで爾は酷い有様に陥ったのだ。実に如何なる時でも、太陽の輝きで満月の光〔を除く〕ようには、この者の威光の力を除くことは出来ないのだ。」

以上のヴィシュヌの言葉を聞いて、彼は恐怖に心悩まされ、王たる神のもとへ昇って[32]、速やかに身の寄せ場とした。〔マーラは〕合掌して跪き、たどたどしく声を発して彼に何度も言った。

「シヴァよ、爾は私の体から蛇を含めて屍を〔全て〕除かれよ。〔これは〕憐みの心のないウパグプタが結び付けたものです。」

それから事の顛末を聞いて、主宰神は実に怒りで眼を真っ赤にして[33]、マーラに返答した。「何ともまあ爾の愚かなことか。」と咎めながら[34]。

「あぁ、最も邪悪で愚かな爾は現れ出ては[35]、聖者の師であり、吉祥なる厚徳者であり、崇敬されるべき比丘に対し絶えず危害を加えて来た。私は力を備えているけれども、今、〔屍を〕外してやることは実に断じて出来ない[36]。そんな訳だから、爾は憐みの心を示す[37]、まさしくその彼を身の寄せ場とせよ。」

パーリ聖典外文献 *Lokapaññatti* 及び漢訳経典が伝える「ウパグプタとマーラの物語」にはシヴァとヴィシュヌに関する言及は見られない。Av-klp 所収話のみがヴィシュヌの名を挙げる。しかし

[30]写本の読みは bhikṣubandhisarpaṃ もしくは bhikṣubandhisarpa であるが意味不明である。また韻律にも抵触する。六詩節先に bandhitaṃ (m.c.) upaguptena とあることを考慮すると、*bhikṣubandhitasarpaṃ の誤写ではないか。

[31]cd 句の写本の読みはいずれも pratimocatu yadaityārebhaccharaṇam āgataḥ であるが、意味をなさない。ya と ca という二つの字形が混同され易いことを念頭に入れると、元の読みは *pratimocatu ca daityāre bhavaccharaṇam āgataḥ ではないか。c 句が一音節余るが、最初の二音節を音節分解と見れば śloka 正規形として処理出来る。従ってこの読みを提案する。

[32]二写本共に ārūpya という読みを呈示するが、*āruhya「昇って」と修正すべきか。ここでは āruhya と同意と解釈する。

[33]当該箇所は本来 °aruṇekṣana eva ca とすべきを、韻律上 °aruṇekṣaneva ca としたものであろう。

[34]当該箇所は nindan/ninditavān とあるべきであるが、写本通り ninditaḥ と読む。過去受動分詞の能動的用法の用例については STRAUBE [2007: 525ff] を参照されたい。

[35]二写本共に a 句冒頭を nirjalene とするが、意味不明であり韻律にも反する。意味上最も期待されるのは *nirjātena という読みであるが、写本の読みとかなり乖離してしまう。暫定的に *nirjātena という読みを提案する。

[36]当該箇所は本来 śakyam evāsti hi でなければならない。āśakya evāsti hi という形は韻律を考慮したものであろう。

[37]二写本とも karuṇākāra という読みを示すが、韻律に抵触し意味不明である。元の読みは *karuṇākārasya ではないか。但し karunā と °kāra が格限定複合語を形成する用例がない点に問題が残る (karuṇām karoṣi という用例はある)。

問題の所在は、単にシヴァとヴィシュヌの名前が現れるか否かということにあるのではない。それはAAv-mの編者がシヴァとヴィシュヌに「ウパグプタの結び付けた屍を取り外すことは自分には出来ない」と表明させていることにある。これは何を意味するか。それはAAv-mの編者が仏弟子ウパグプタをヒンドゥー教の神格の上位に位置付けようとしていたことを意味する。AAv-mの編者が「ウパグプタとマーラの物語」の編纂に当たり、当時のヒンドゥー教の勢力を強く意識し、両者に対する仏教の優位性を説こうとしていたことが読み取れよう。

6 AAv-m所収「ウパグプタとマーラの物語」編纂の思想的背景

6.1 菩提行の顕揚

Av-m類と大乗仏教の関連を指摘したのはFEER [1891] とSPEYER [1909] である。高畠 [1955] はRAv-mに *Ratnāvadānatatva* と題するテキストを接続させた校訂テキスト (高畠はこれに *Ratnamālāvadāna* という表題を付した) に基づき[38]、Av-m類に見られる大乗思想について論じた[39]。これに対し岩本 [1967: 165–168] はAv-m類を大乗仏教徒の所産と見ることに慎重な立場をとり、漢訳『過去現在因果経』を状況証拠に挙げ、大乗仏教の術語や思想が見られることを根拠に、Av-m類を大乗仏教に属する一つの文学類型として総括的に論じることは出来ないと反論した。

確かに大乗仏教の思想概念や術語が現れることを根拠にその作品を単純に大乗仏教の所産と見做すことは出来ない。Haribhaṭṭaの *Jātakamālā* がその例である[40]。しかし注意すべきは、KalpAv-mやRAv-mの編者達は単に大乗思想を知っていただけではなく、それを顕揚する姿勢を示しているということである。これは高畠 [1955] が挙げる直接証拠から裏付けられることであって、状況証拠に基づく岩本 [1967] の反論は高畠 [1955] の説を論駁するには聊か脆弱と言わねばならない。従って我々はKalpAv-mやRAv-mを、少なくともそのAvśの詩形改稿部分に関する限りでは、大乗仏教徒の編纂と見做して差支えないと思われる。

事情はAAv-m所収「ウパグプタとマーラの物語」ではどうか。同話と大乗仏教との関連を知る手掛かりを我々はその冒頭部と帰結部に僅かながら見出すことが出来る。

冒頭部を見よう。シャーナヴァーシンの下で出家し阿羅漢となったウパグプタはマトゥラーで説法を行う。その説法を聴聞しようとして民衆が集まるのを見たマーラは説法の妨害を企てる。Divy所収話はそれを次のように伝える。

> [Divy 356.24–357.3]
> mathurāyāṃ ca śabdo visṛtaḥ upagupto nāmālakṣaṇako buddho 'dya dharmaṃ deśayiṣyatīti | śrutvā cānekāni prāṇiśatasahasrāṇi nirgatāni | yāvat sthaviropaguptas samāpadyāvalokayati kathaṃ tathāgatasya pariṣan niṣaṇṇā | paśyati cārdhacandrākāreṇa parṣad avasthitā | yāvad

[38] *Ratnāvadānatatva* の構成については岡野 [2006] を参照されたい。

[39] 高畠 [1955] の論旨は次の通りである。すなわち (1) RAv-m及び *Ratnāvadānatatva* の説話は「三宝を敬礼することで菩提を成就し、完全に悟った者の地位を得る」という内容を含み、Avśの並行話に認められる思想に比べかなり発展した大乗思想が読み取られ得る。(2) 菩提行としての十波羅蜜が物語の随所で説かれる。(3) 二三の例外を除いて、物語の結語はウパグプタ長老がアショーカ王に「菩提を成就し、完全に悟った者の地位を得よ」と説くものであり大乗仏教の理想を明示している。(4) 仏陀が陀羅尼を唱え、その功徳を説法する内容を含む物語が存在する、というものである。

[40] HAHN [1985: 252–253] によれば、仏教詩人Haribhaṭṭaは *Jātakamālā* で六波羅蜜に言及しているように、大乗仏教の信奉者であったとされる。しかし同時にHAHN [1985] はHaribhaṭṭaの作品に特定の大乗の学説の哲学を認めることは出来ず、その説話題材は上座部部派の説話集成から借用されたものであり、それが根本有部と近い関係にあることを指摘する。

avalokayati kathaṃ tathāgatena dharmadeśanā kṛtā | paśyati pūrvakālakaraṇīyāṃ kathāṃ kṛtvā satyasamprakāśanā kṛtā | so 'pi pūrvakālakaraṇīyāṃ kathāṃ kṛtvā satyasamprakāśanāṃ kartum ārabdhaḥ | māreṇa ca tasyāṃ parṣadi muktāhāravarṣam utsṛṣṭaṃ vaineyānāṃ manāṃsi vyākulīkṛtāni ekenāpi satyadarśanaṃ na kṛtam |

そしてマトゥラーには「ウパグプタと名乗る、〔三十二〕相を欠く仏陀が今、法を教示するだろう。」という言葉が広まった。そして〔それを〕聞いて、数十万の衆生が〔都城の〕外に出た。ところでウパグプタ長老は入定し観察した。「如来の聴衆はどのようにして座っていたのだろうか。」と。そして〔彼は〕知見した。「聴衆は半月の形をとっていた。」と。さてまた〔彼は〕観察した。「如来はどのようにして法を教示したのだろうか。」と。〔彼は〕知見した。「先んずる時になされねばならない話をしてから[41]、〔四〕諦を説明したのだ。」と。彼も同じく先んずる時になされねばならない話をしてから〔四〕諦を説明し始めた。するとマーラはその聴衆の上に真珠の首飾りの雨を降らせた。訓導されるべき者達の心は混乱に陥り、誰一人〔四〕諦を見なかった。

以上に並行する箇所を AAv-m 所収話は次のように伝える。

[AAv-m $N_1$14a7–13; $T_1$25a3–12]
mathurāyāṃ tathā tasya tacchabdo visṛto 'bhavat |
upagupto yatiḥ so 'tra saddharmaṃ samupādiśat ||
evaṃ tacchabdam ākarṇya bahavaḥ paurikās tadā[9] |
taddharmadeśanāṃ śrotuṃ tadāśramam upāyayuḥ[10] ||
tataḥ so 'rhan samālokya tallokān samupāgatān |
*saddharmadeśanāṃ kartuṃ[11] manasaivaṃ vyalokayat ||
kathaṃ śāstrur munīndrasya[12] pariṣat samavasthitā |
kathaṃsamupagato dharmadeśanām akarot tadā ||
iti vilokayan so 'rhan prādrākṣīj jñānacakṣuṣā |
ardhacandrasamākārā parṣac chāstur avasthitā[13] ||
pūrvakālakathāṃ kṛtvā satyamārgān samārabhat |
sa śāstā bhagavān buddhaḥ saddharmaṃ samupādiśat ||
iti buddhānubhāvena buddho so 'rhan tathā sabhāṃ |
kṛtvā dharmopadeśaṃ ca kartum evaṃ samaicchata ||
tataḥ so 'rhan sabhāmadhye svāsane samupāśritaḥ[14] |
pūrvavṛttaṃ sadārabhya satyamārgān upādiśat ||
taddharmadeśanāṃ śrutvā sarve te śrāvakā mudā |
*saddharmaṃ samupāśritya bodhicaryāṃ *samicchire*[15] ||

[9]paurikās tadā] N_1; paurikā janā T_1.
[10]upāyayuḥ] $N_1T_1^{pc}$; upāyayauyuḥ T_1^{ac}.
[11]*saddharmadeśanāṃ kartuṃ] Ex conj.; saddharmadeśakartuṃ N_1T_1.
[12]munīndrasya] N_1; munindrasya T_1.
[13]avasthitā] N_1; avasthitaḥ T_1.
[14]samupāśritaḥ] N_1; samupāśritāḥ T_1.
[15]*samicchire] Ex conj. samīcchire N_1T_1, Cf. RAv-m 16.59.

[41]いわゆる次第説法と呼ばれるものである。四聖諦に先んじて仏陀が施論・戒論・生天論、欲が不浄であること、出世間法が重要であることを説いたことを指す。岡本 [2003–2004: 124, fn. 60]、平岡 [2007: I, 94, fn. 55] を参照されたい。

tathā taddharmam ākarṇya sarvāṃs tān bodhivāñchinaḥ |
dṛṣṭya sa śaṅkito māras[16] tadvighnaṃ kartum ārabhat ||

そのようにしてマトゥラーには彼 (= ウパグプタ) のその言葉が広まった。かの苦行者ウパグプタはこの場所で正しい法を教示した。彼の言葉をそのように聞いて、沢山の都城の住人達がその時、彼の法の教示を聴聞しに彼の精舎へとやって来た。それからその阿羅漢はそこに住む人々が連れ立ってやって来たのを見て、正しい法を説こうとして心で次のように観察した[42]。

「師、聖者の上首の聴衆はどのような状態にあったのだろうか。何を頼りにして〔仏世尊は〕その時法を説かれたのだろうか。」

その阿羅漢は以上のように観察し、慧眼で知見した。

「師の聴衆は半月と等しい形をとっていた。〔仏世尊は〕先んずる時に〔なされねばならない〕話をなしてから、〔四〕諦〔八正〕道を〔説き〕始めた。かの師、仏世尊は正しい法を教示されたのだ。」

以上のように〔知見して〕、かの仏阿羅漢は仏陀の力を行使してそのように集会を編成し、そしてそのように法を教示しようとした。それからその阿羅漢は集会の場の中央にある自分の座に腰掛けて、以前に起こったことに関して絶えず〔四〕諦〔八正〕道を教示した[43]。彼の法の教示をその声聞達は皆喜んで聴聞し、正しい法に依って、菩提行を求めるようになった[44]。そのようにして彼の法を聞いて彼等が皆菩提を求めるようになったのを見て、かのマーラは懸念を抱き、それ (= 法の教示) を妨害し始めた。

AAv-m 所収話が伝える所は Divy 所収話のそれとほぼ一致する。しかし AAv-m 所収話にはマーラの登場場面の前に「声聞達が菩提行 (bodhicaryā) を求めるようになった」という、Divy にはない一節が挿入されている点に注意すべきである。大乗仏教が十波羅蜜を強調し、衆生に菩提行の実践を説くのは夙に知られる所である。この点で AAv-m 所収話は Divy 所収話に比べ思想的発展を見せていることが認められよう。

6.2 浄土思想との関連

AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」に Divy (KalpM) や Av-klp 所収本に比べて発展した思想を認めることが出来るもう一つの箇所が、物語の結末部分である。

マーラを訓導したウパグプタはマトゥラーの民衆に法を説く。彼は阿羅漢果を獲得したならば、ウルムンダ山の洞窟に籌を投げ入れるよう民衆に述べ、一万八千人の民衆は阿羅漢果を体得して洞

[16] māras] T_1^{pc}; māyas N_1; māryaras T_1^{ac}.

[42] c 句の写本の読みはいずれも韻律に抵触する上に、意味が通じない。本来の読みは *saddharmadeśanāṃ kartuṃ ではなかったか。本訳では暫定的にこの読みを採る。

[43] 「以前に起こったこと」が意味する所が理解し難い。二詩節前でも pūrvakālakathāṃ という曖昧な表現をしていることを考慮すると、憶測の域を出ないが、AAv-m 所収話の編者が Divy 所収話の並行箇所にある pūrvakālakaraṇīyāṃ kathāṃ の意味を十分理解せず、「過去になされるべき話」と解釈したことに起因するのではないか。

[44] 二写本共に samīcchire という読みを呈示するが、RAv-m 16.59 の用例に照らして *samicchire と訂正すべきであろう。動詞の現在語幹に完了の人称語尾が導入される用例は既に TATELMAN [1999: 186] が報告する所である。

窟に籌を投げ入れる。この箇所まで AAv-m と Divy が伝える所は全く同じである。しかし AAv-m 所収話はこの後の顛末を次のように述べる。

[AAv-m N_1 18a4–8; T_1 32a10–32b4]
yo 'bhūd bhagavatā pūrvaṃ nidiṣṭo dharmadeśakaḥ |
tenārhatādhunā yo 'sau kāmadhātvīśvaro 'pi ca ||
vinīya saugatādharmaḥ samādiśya prakāśitā |
upaguptābhidhaḥ so 'rhan dharmavādivināyakaḥ ||
śāstṛkalpo mahābhijño māhātmā jñānabhāsvaraḥ |
sarvatraidhātukasthānāṃ *sattvānāṃ hitakāmy ayam(?)[17] ||
saddharmaṃ samupādiśya viharaty āśrame svake |
taddharmadeśanāṃ śrutvā sarve sattvāḥ prabodhitā ||
saddharmaṃ samupāśritya bhavanti bodhicāriṇaḥ |
ye tasya bhajanaṃ kṛtvā śṛṇvanti dharmam ādarāt ||
satkṛtya śraddhayā nityaṃ te vrajanti sukhāvatīm |
iti tadvisṛtaṃ śabdaṃ sarvatra bhuvaneṣv api ||
śrutvā sarve 'pi lokāś ca taddharmaṃ śrotum *icchire[18] |
evaṃ sa upagupto 'rhan saddharmaṃ samupādiśat ||
sarvasattvahitaṃ kṛtvā vijahāra ciraṃ tathā |

この法の教示者 (= ウパグプタ) は嘗て世尊から教えを受けた。その阿羅漢たる彼は、今やこの欲界の主さえも教導し、善逝の法を説き、明らかにさせた。そのウパグプタと名乗る阿羅漢は法を説く導師であった。この者は師に相応しい者であり、大神通を備え、気高く、知によって燦々と輝き、三界にいる有情達全員を利益しようと欲し、正しい法を教示し、自らの精舎に住していた。彼が法を教示するのを聞いて一切衆生は教化され、正しい法を拠り所とし菩提行を修する者となった。

「それ (= 法) を崇敬し、謹んで、熱心に信心の心から絶えず法を聴聞する者達、彼等は極楽 (sukhāvatī) に赴く。」

彼が発した以上の言葉を〔三界〕全土で人々は皆聞いて、彼の法を聞こうと欲した。かくかの阿羅漢ウパグプタは正しい法を教示したのである。〔彼は〕一切衆生を利益して、長い間そのようにして時を過ごした。

AAv-m の所伝はこの後 Av-klp 第 72 章第 72 詩節をそのまま引用し、次のようなジャヤシュリー長老の結語を以て物語に幕を引いている。

[AAv-m N_1 18a9–11; T_1 32b6–9]
iti matvopaguptasya bhāṣitaṃ yat subhāṣitam |
śrutvā tac ca tathā loke pracārayitum arhatha ||
upaguptasya bhikṣor yad avadānam idaṃ mudā |
satkṛtya śraddhayā ye 'pi śṛnvanti śrāvayanti ca ||
te sarve pāpanirmuktāḥ saddharmasādhanodyatāḥ |
sadgatau satsukhaṃ bhuktvā prānte yānti jinālayam ||

[17] *sattvānāṃ hitakāmy ayam(?)] Ex conj.; sattvanāṃ hitakāmy ayām N_1T_1.
[18] *icchire] Ex conj.; īcchire N_1T_1.

ity ādiṣṭaṃ yatīśena sthavireṇa jayaśriyā |
śrutvā te bhikṣavaḥ sarve 'bhyanumodya nanandire ||

「以上のように考え、〔私が〕語ったウパグプタに関する善説を〔爾等は〕聞いて、そしてかく世間にどうか周知させて欲しい。『ウパグプタ比丘のアヴァダーナ、これを喜んで、熱心に、信心の心を以て聴聞する者達も聴聞させる者達も皆、悪から離れ、正しい法を完成させようと努め、善趣において真の楽を享受し、最後には勝者の住む所に赴く。』と。」

かく苦行者の上首たるジャヤシュリー長老が説いたことを聞いて、かの比丘達は皆、〔「然り」と〕頷き[45]、歓喜したのである。

物語の冒頭部に同じく、ここでもAAv-m所収話は「一切衆生が菩提行を修する者(bodhicārin)となった」ことを語る。さらに注目すべきはAAv-m所収話が「法に耳を傾けるならば極楽(sukhāvatī)に赴く」という言葉をウパグプタに表明させていることである[46]。AAv-mがその材源としたDivy所収本は上座部の伝承に基づくので[47]、物語は「マトゥラーの一万八千人の住民が阿羅漢果を得た」という記述を以て完結する。AAv-mの編纂者は恐らく浄土思想を顕揚する意図を持っていたので、Divy所収本を詩形改稿するだけではその目的を果たすことが出来ないことに気付いたのだと考えられる。$N_1$18a4; $T_1$32a10以降の七詩節は、その目的を果たすべく挿入されたものであろう。この種の詩節は大乗経典中に内容、意図を同じくするものが見られる通り[48]、岩本[1967]が言うような、AAv-mの編者が大乗の教義を知っていて大乗の術語を挿入したという性格のものではない。SPEYER [1909]が推定したように、AAv-mの編者が大乗仏教の宣教者であり、伝統的な上座部の説話を基にして大乗の浄土思想を顕揚する意図を持っていたことを示唆するものである。

7 結語

以上からAAv-m所収「ウパグプタとマーラの物語」について次の二点が推定されよう。

[45]この箇所はAv-m群に見られる定型表現である。通常iti śrutvā ... tathety abhyanumoditvā「以上〔長老が語ったことを〕聞いて、〜は『然り』と頷いて・・・」という形で用いられる(用例についてはRAv-m 10.148等を参照されたい)。この用例に照らし、tathetiをabhyanumodyaの前に意味上補う。

[46]藤田[1970: 431–516]が指摘するように、極楽(sukhāvatī)の光景描写に類似した記述は大乗経典一般に見られ、その観念自体は初期大乗仏教に一般的なものである。またその観念は初期仏教や部派仏教時代の転輪王神話のみならず、汎インド的なUttarakuru州神話やバラモン教、ヒンドゥー教に説かれる梵天やヴァルナ神、ヤマ神の世界に関する神話或いはインド古来の霊場の概念や仏塔崇拝に起源するとされる。しかし極楽という観念が詳細にまとまって説かれているのは浄土経典である。

[47]Divy所伝のアショーカ王伝説が根本有部の伝承と親密な関係を持つことについては、松村恒・淳子[1995]によって指摘されている。*Kalpanāmaṇḍitikā*の作者Kumāralātaは玄奘が報告する所によると経量部の祖とされる。しかしHAHN [1985: 255–256]は*Kalpanāmaṇḍitikā*の蔵漢訳に存するKumāralātaの帰敬偈に信頼を置き、Kumāralātaが帰敬偈で有部に属する人物を讃え崇敬していることを根拠に、Kumāralātaが説一切有部の伝統に身を置いていた人物であったと推定する。Kṣemendra本については管見の及ぶ限り大乗仏教の術語なり思想なりを見出すことは出来ない。

[48]例えば大乗経典の九法の一つに数えられる*Samādhirājasūtra*(『三昧王経』)第18章中の偈文が類例に挙げられよう。*Samādhirājasūtra* 18.48–52: bhikṣubhikṣuṇikāś caiva upāsaka-upāsikāḥ | ṣaṭsaptati prāṇakoṭyo yehi sūtram idaṃ śrutam || te'pi ... maitreyasya ca buddhasya pūjāṃ kṛtvā niruttarām | saddharma śreṣṭhaṃ dhāritvā gamiṣyanti sukhāvatīm ||(「そして実に、この経典を聴聞する比丘達と比丘尼達、在家の男女という七億六千の有情、彼等も・・・そして、弥勒仏をこの上なく供養し、最高の正しい法を護持して、極楽に赴くであろう。」)

(1) AAv-m 所収「ウパグプタとマーラの物語」が編纂される時代背景には北インド、特にネパールにおけるヒンドゥー教の台頭があった。AAv-m の編者はこれに対抗意識を抱き、ウパグプタをヴィシュヌとシヴァの上位に位置付けることで、仏教のヒンドゥー教に対する優位性を平信徒に説こうとした。

(2) 彼 (等) はまた大乗仏教の宣教者であった。彼 (等) は上座部が伝承するウパグプタ伝説に取材し、冒頭部と結末に菩提行の推奨と仏法の聴聞による極楽への再生という内容を加味することによって、「ウパグプタとマーラの物語」を民衆向けの説教文学として役立てようとした。

尤も本考察は AAv-m という氷山の一角を対象としたものであり、岩本 [1967] が言うように AAv-m が段階的に成立したという可能性を考慮すれば、一説話中の二、三の例のみを以て AAv-m を大乗仏教の所産と見做すことには慎重にならねばならない。また菩提行や極楽といった大乗仏教の概念の歴史的展開も併せて考える必要があろう。

参考文献

BONGARD-LEVIN, Grigoriĭ Maksimovich and O. F. VOLKOVA 1963, 1965 "The Kuṇāla Legend and An Unpublished Aśokāvadānamālā Manuscript," *ISPP* 5–6, pp. 115–132, 315–318, 67–70, 309–319.

DARGYAY, Lobsang 1978 *Die Legende von den sieben Prinzessinnen* (*Saptakumārikā-avadāna*) (=WSTB Heft 2). Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien.

DE JONG, Jan Willem 1975 "La légende de Śāntideva," *IIJ* 16, pp. 161–182. = *Buddhist Studies* (Berkeley: Asian Humanities Press, 1979), 119–140.

—— **1977** "The *Bodhisattvāvadānakalpalatā* and the *Saḍdantāvadāna*," in *Buddhist Thought and Asian Civilization: Essays in Honor of Herbert V. Guenther on His Sixtieth Birthday Ed. by Leslie S. Kawamura and Keith Scott*. Emeryville: Dharma Publishing, pp. 27–38.

—— **1979** *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā: Pallavas 42–108* (=StPhB Monograph Series II). Tokyo: The Reiyukai Library.

FEER, Léon 1891 *Avadāna-Çataka: Cent légendes bouddhiques* (=Annales du Musée Guimet XVIII). Paris: Leroux. (Reprint: Amsterdam: Academic Publishers Associated Oriental Press, 1979)

HAHN, Michael 1977 *Haribhaṭṭa and Gopadatta: Two Authors in the Succession of Āryaśūra* (=StPhB Occational Paper Series I). Tokyo: IIBS.

—— **1985** "Vorläufige Überlegungen zur Schulzugehörigkeit einiger buddhistischer Dichter," in *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur hrsg. von Heinz Bechert* (=AAWG Philologisch-historische Klasse Dritte Folge #149). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, Teil 1, pp. 239–257.

—— **1990** "*Puṇyarāśyavadāna* —Another Legend by Gopadatta?," in *Frank-Richard Hamm Memorial Volume, October 8, 1990, Ed. by Helmut Eimer* (=IndTib 21). Bonn: IndTib Verlag, pp. 103–132.

HANDURUKANDE, Ratna 1984 *Five Buddhist Legends in the Campū Style: From a Collection Named Avadānasārasamuccaya* (=IndTib 4). Bonn: IndTib Verlag.

MITRA, Rājendralāla 1882 *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*. Calcutta: The Baptist Mission Press.

PRZYLUSKI, Jean 1923 *La légende de l'empereur Açoka* (*Açoka-Avadāna*): *Dans les textes indiens et chinois*. Paris: Paul Geuthner.

SPEYER, Jacob Samuel 1906–1909 *Avadānaçataka: A Century of Edifying Tales Belonging to the Hīnayāna* (=Bibliotheca Buddhica III). 2 vols., St. Petersburg: Académie impériale des sciences. (Reprint: Osnabrück: Biblio Verlag, 1970)

STRAUBE, Martin 2007 "Die Adaptation von Kṣemendras *Sudhanakinnaryavadāna im Bhadrakalpāvadāna*," in *Indica et Tibetica: Festschrift für Michael Hahn zum 65. Geburtstag von Freunden und Schülern überreicht hrsg. von Konrad Klaus und Jens-Uwe Hartmann* (=WSTB Heft 66). Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, pp. 521–538.

—— **2009** *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhaṭṭas Jātakamālā* (=Veröffentlichungen der Helmuth von Glasenapp-Stiftung Monographien 1). Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

STRONG, John S. 1983 *The Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna*. Princeton: Princeton University Press. (Reprint: Delhi: Motilal Banarsidass, 2002)

TATELMAN, Joel 1999 "The Trials of Yaśodharā': The Legend of the Buddha's Wife in the *Bhadrakalpāvadāna*," *Buddhist Literature*, vol. 1, pp. 176–261.
ZINKGRÄF, Willi 1940 *Vom Divyāvadāna zur Avadāna-Kalpalatā: Ein Beitrag zur Geschichte eines Avadāna* (=Materialien zur Kunde des Buddhismus 21. Heft). Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.
岩本 裕 1967 『仏教説話研究序説』(= 仏教説話研究第 1) 京都: 法蔵館. (新版: 東京: 開明書院 1978)
岡野 潔 2005 「Avadānakalpalatā から avadānamālā 類へ」(『印仏研』54-1, pp. 367–374)
—— 2006 「Subhāṣitamahāratnāvadānamālā について」(『南アジア古典学』1, pp. 1–19)
岡本 健資 2003–2004 「Divyāvadāna 第 26 章所収ウパグプタの物語試訳—猿の瞑想・娼婦への教化・マーラへの教化—」(『インド学チベット学研究』第 7/8 号 pp. 102–136)
高畠 寛我 1955 「アヴァダーナに於ける大乗思想」(『印仏研』3-2, pp. 406–409)
引田 弘道 2004 「アショーカ王物語 (その一)」(『人間文化』19, pp. 347–353)
平岡 聡 2007 『ブッダが謎解く三世の物語—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳—』東京: 大蔵出版
藤田 宏達 1970 『原始浄土思想の研究』東京: 岩波書店
本田 義央 2006 「ボージャ著作における特殊な美点 (vaiśeṣikaguṇa) と模倣表現 (anukaraṇa)」(『比較論理学研究』第四号 pp. 37–41)
松村 恒・松村 淳子 1995 「アショーカ王伝の構成と材源」(『神戸国際大学紀要』第 47 号 pp. 29–35)

付論　Ratnākara 雑記

Haravijaya（『シヴァの勝利』）について

Kalhaṇa (12 世紀) が編纂した史書 *Rājataraṃginī*（『王統流覧』）第五章第 34 詩節にはカシミールの Avantivarman 王 (在位 855–883 年) の庇護下に名声を博した詩人四人の名が挙がっている。すなわち Muktākaṇa、*Kapphiṇābhyudaya*（『カッピナ王の称揚』）の作者Śivasvāmin、詩論書 *Dhvanyāloka*（『暗示の光』）の作者Ānandavardhana、そして茲に取り上げる叙事詩カーヴィア *Haravijaya*（『シヴァの勝利』、Harav) の作者 Ratnākara である[1]。Harav については拙論「クシェーメーンドラの仏教説話に見られる韻律について」『哲学』62 (2010): 129–143 で嘗て触れたことがある。しかし脱稿後、拙論に提示した詩節に別様の解釈が出来ることを Harav に関する先行研究から知り得た。また Harav 第一章を通読している段階で興味深い点を見出したので、以下で拙論に対する若干の補足を行いたい。

Harav はシヴァによる悪魔アンダカの征服を主題とする全 50 章 4351 詩節からなる長大な作品である[2]。Ratnākara は Harav の末尾に付した詩節中で、若き Cippaṭa Jayāpīḍa 王 (在位 833–844 年)

[1] *Rājataraṃginī* 5.34: muktākaṇaḥ śivasvāmī kavir ānandavardhanaḥ | prathāṃ ratnākaraś cāgāt sāmrājye 'vantivarmaṇaḥ ||「Avantivarman 王の治世下で詩人 Muktākaṇa と Śivasvāmin、Ānandavardhana、Ratnākara は名声を博した。」)。テキストは STEIN 校訂本 (Bombay: Education Society's Press, 1892) に従った。

[2] Harav を西洋の学界に紹介したのは BÜHLER [1877: 42–45] である。彼は作者 Ratnākara が活躍した年代が九世紀に置かれることを指摘し、Harav 全 50 章の概略を示し、Harav を文学作品的観点から適切かつ簡潔に論評している。その趣旨は次の通りである。Ratnākara が基にした叙事詩の筋は約四千詩節からなる作品を著すに足る題材を殆ど提供しない。Ratnākara はサンスクリット詩学の諸規則がマハーカーヴィアに導入することを許容する主題全体、つまり季節や情景、宮廷内の娯楽等の描写に力を入れている。彼はインドの詩論家が非常に高度なものと見做す技巧に習熟していることを示そうとした。Harav はパンディット達が喜びを見出す奇抜な芸当に富んでいる。すなわち samudga (半詩脚全体が繰り返される同音反復の一種) や padmabandha、avali、pratilomānuloma や pratilomavilomārdhapāda (いずれも一種の回文) に溢れ、幾つかの章例えば第三章では、どの詩節或いはどの半詩行にも〈同音反復〉(yamaka) を示している。また一層複雑な韻律が自由に用いられており、その言語は簡素と言えたものではない。Harav は全体として見ると、欧州人には愛好されることは決してないであろう。しかしこの作品は、多くのサンスクリット詩と同様、表現の迫力と優美さを備えた個々の詩節や一節を沢山含んでいる。またこの作品はシヴァ教の神話と哲学に関して興味あるものである。

Harav に関する比較的最近の研究として SMITH [1985] がある。同書は近年のカーヴィア研究の先駆と呼ぶべきもので、インドの詩論家や近代西洋の研究者による Harav の否定的な評価に対して、伝統的な詩論

の為に〈同音反復〉(yamaka) と〈掛詞〉(śleṣa) を駆使し[3]、Bāṇa (七世紀) を模範として同作品を著

の立場を離れて行間を読むという方法論に立ち、その文学作品的価値を捉え直そうとしたものである。同書の前半部はサンスクリット宮廷詩と Harav の全般的な成立背景を考察することに、後半部は作品の構成、登場する主要人物等に注目して Harav を分析することに充てられている。本文中の英訳は比較的正確であるが、作品が膨大であることもあり、評価の基準となる詩節の提示は DE JONG [1988: 156] が "David Smith stresses repeatedly that the Haravijaya has to be appreciated as a whole ... It is certainly much easier to admire single verses than an entire poem, especially one which comprises 4351 verses!" と評した通り、「良い所取り」の印象を受ける。また Harav の評価に関する研究史を事細かに提示しているのに対し、テキストに関する研究史が非常に貧弱であることが惜しまれる。尚、同書の内容を知るには他に BUDDRUSS [1988]、KHOROCHE [1987]、SLAJE [1995] による書評が参考になろう。前二者は同書に中立的な立場をとるが、SLAJE [1995] は SMITH [1985] が文学作品が定義化、分類化された詩学体系を確立する術であったとする見解に偏らず、「詩人達は実際には批評家の規定よりは寧ろ、先行する詩人や模範とする詩人の作品から強く影響を受けており、マハーカーヴィアの伝統が、実際には詩論家が立てる理論に左右されない芸術形式であった」という見解を説得力ある形で示した点を高く評価する。

Harav のテキストについては Kāvyamālā 所収本 (Bombay: NSP, 1890) を本考察の底本としたが、比較的近年のテキスト出版として Goparaju RAMA が 1982–1983 年に Allahabad から二巻本で出版したものがある。本考察ではこのテキストを参照し得なかったが、BUDDRUSS [1985] によると次のような問題点があるという。(1) 英語によるテキストの概要は貧弱である、(2) 50 章の内容梗概は第 30 章で中断されている、(3) SCHMIDT [1915] の業績は考慮されていない、(4) 脚注には矛盾点がある、(5) Km 所収本は 13 章まで校合に用いた二写本の異読を挙げているが、その異読が当該テキストには部分的に欠落している。以上から BUDRUSS [1985] は目下、当該テキストは Km 所収本と併せて利用しなければならないと言う。

[3]Harav *2: lalitamadhurāḥ sālaṃkārāḥ prasādamanoramā vikaṭayamakaśleṣoddhāraprabandhanirargalāḥ | asadṛśagatīś citre mārge mamodgirato giro na khalu nṛpate ceto vācaspater api śaṅkate ‖ (「優美且つ甘美で、〈修辞〉(alaṃkāra) を含み、〈明快さ〉(prasāda) で心を楽しませ、途轍もない〈同音反復〉と〈掛詞〉の為の一連の選び抜かれた部分によっても滞りをきたすことがなく、citra (詩節中の音節を剣や蓮華等の図柄 [citra] に配列すると意味が浮かび出る修辞法の一種) という手法に関してはその技法に類を見ない言葉を発する私を、王よ、ヴァーチャスパティの心でさえ訝しがることは決してないだろう。」)。

SMITH [1985: 104] が提示する当該詩節の解釈には二点程賛同できない箇所がある。その第一点目は b 句を "[and yet] unrestrained in the sections of difficult *yamaka* and *śleṣa*" と訳していること。これに筆者が不審を抱く理由は次の二点にある。

- Ratnākara が自分の言葉を「難解な〈同音反復〉や〈掛詞〉の部分では遠慮ない」という、読者に悪印象を抱かせる表現を用いて評しているのは奇妙である。
- 仮にこの解釈をとった場合、後続する第六詩節 b 句 (本考察脚注 4 参照) の内容と噛み合わない。

nirargala を後分とする複合語の用例を探すと、Bhavabhūti の戯曲 *Mālatīmādhava* 第五幕第 26 詩節にある。対応するテキスト (Ed. by R. G. BHANDARKAR, Bombay: Government Central Press, 1875) と和訳は次の通りである。*Mālatīmādhava* 5.26: maraṇasamaye tyaktvā śaṅkāṃ pralāpanirargalaṃ prakaṭitanijasnehaḥ so 'yaṃ sakhā pura eva te | sutanu visṛjotkampaṃ saṃpraty asāv iha pāpmanaḥ phalam anubhavaty ugraṃ pāpaḥ pratīpavipākinaḥ ‖ (「〔お前が〕自分の愛情を示した、お前の友たるその私は、死の期に及んで不安の種を捨て、悲嘆から解放され、まさに目の前にいる。容姿麗しき女よ、沸き起こる慄きを捨てよ。その悪漢は今茲で忌まわしい異熟が起こる罪過がもたらす恐ろしい果を味わうだろう。」)

註釈家 Jagaddhara は a 句末に pratāpanirargalaṃ、pralāpanirargalaṃ という二通りの読みがあることを指摘し (*Mālatīmādhava* 228.2–4)、それぞれ pratāpena nirargalo 'nabhibhāvyaḥ「激しい苦しみから解き放たれた、すなわち屈せられることがない」、nātha mādhavetyādimālatīpralāpena nirargala ucchṛṅkhala「貴方、マーダヴァ様云々というマーラティーの悲嘆から解き放たれた、すなわち束縛されることがない」と解釈する。この用例を参考にすると °uddhāraprabandhena nirargalāḥ「一連の選び抜かれた部分に阻まれることがない」、すなわち「〈同音反復〉や〈掛詞〉を示す為に選び抜かれた箇所によって、自らの言葉が読み手に支障をきたすことがない」という意味に解釈出来るのではないか。

第二点は c 句末を "the verses which I pour forth" と解していること。この訳は mama「私の」を udgirato

したと述べている[4]。しかし彼が詩人 Māgha (七世紀後半) の叙事詩カーヴィア*Śiśupālavadha* (『シシュパーラの殺戮』) を意識し、これを凌駕しようとしていたことは JACOBI [1890: 239–244] が指摘する通りである[5]。尤も Harav は Māgha の作品を凌駕するには至らず、文学作品として高い評価を得ることはなかった。この理由としては極度に技巧を凝らした文体が西洋的な文学作品の価値基準に合わないことが挙げられている。しかし語彙が難渋なことに加え[6]、Harav が著された時代の詩論の趨勢が〈修辞〉(alaṃkāra) 重視から〈情調の暗示〉(rasadhvani) に代表される非言詮重視への過渡期に当たり、作品が後代の注釈家に殆ど顧みられることがなかったことも考えられるだろう。

「発する」の行為主体に解釈したと誤解されかねない訳である。

尚、Ratnākara は各章末のコロフォンで自身についてśrībālabṛhaspatyanujīvino「吉祥なる若き Bṛhaspati の下僕」であると述べている。Bṛhaspati という名は *Rājataraṃginī*第四章第 674 詩節において Cippaṭa Jayāpīḍa 王の敬称として用いられていることから、Ratnākara の活動年代は Jayāpīḍa 王から Avantivarman 王の時代に跨ったものとされている。

[4]Harav *6: dṛbdhaṃ satprajñakair yan na jagati kavibhir vastu tan nāsti kiṃcit kṣuṇṇe kṣuṇṇatvacintā gahanaviṣayatā tasya dūrāstu tāvat | tan mandābhipragalbhaprasaragurugirām agraṇīr bāṇa eko rājan ratnākaraś ca jvalanavad avanau jājvalīti dvitīyaḥ || (「詩作の主題となる事柄は凡そ何であれ、この世界で優れた知識を備えた詩人達によって〔カーヴィアという形に〕編まれてしまっている。個性を欠いたものには、没個性の懸念がある。〔しかし〕それ (= 詩作の主題となる事柄) が理解され難い対象をもつことはまずもって斥けられるべきである。故に穏やかであっても自負に満ち、視野の広さ故に高く評価され得る言葉を操る者達の中で第一級なる者はバーナ唯一人である。王よ、そして第二級なるラトナーカラは原野の火の如く燦然と燃え輝いている。」)

SMITH [1985: 105–106] は詩節 b 句に kṣuṇṇe 'kṣuṇṇacintāgahanaviṣayatā tasya durāstu tāvat という裏の意味が読み取られ得ると主張する。氏の英訳に従った第一義、第二義の解釈はそれぞれ次の通りである。

> 第一解釈: それ (事物) に関して、困難さを排除し、陳腐なものに陳腐さがあるという懸念を排除すべきである (in respect of that [i.e. *vastu*], away with the problem [*gahanaviṣayatā*], with the worry that there is banality [*kṣuṇṇatvacintā*] in the banal [*kṣuṇṇe*])
> 第二解釈: 良く踏みならされている/陳腐なものについて、斬新さへの関心から主題の平凡さをそれ (事物) から遠ざけるべきである (let triviality of topic [*agahanaviṣayatā*] out of concern for novelty [*akṣuṇṇatvacintā*] in the well-trodden or banal [*kṣuṇṇe*] be far from that [i.e. *vastu*])

以上の解釈では次の二点を説明することが難しくなる。

- 第一解釈の場合、定動詞 astu が接続詞なしに kṣuṇṇacintā と gahanaviṣayatā という二つの名詞を主語にとることになる。
- 第二解釈を Ratnākara の本意と見做し、kṣuṇṇacintāgahanaviṣayatā と読んだ場合、脚の第一休止が守られないことになる。

確かに解釈は容易でないが、ab 句で Ratnākara が主張する所は「カーヴィアの主題は既に尽きてしまっているが、マンネリ化を避ける為だからといって、詩人は難解な表現に独創性を見出そうとすべきではない」ということではあるまいか。従って b 句は第一休止までを一文と見做せば、「個性を欠いたものには (kṣuṇṇe)、没個性の懸念が (kṣuṇṇatvacintā) ある。〔しかし〕それ (tasya= 詩作の主題となる事柄) が理解され難い対象をもつことは (gahanaviṣayatā)、まずもって (tāvat) 斥けられるべきである (durāstu)」と解釈出来るのではないか。尚、SMITH [1985] の英訳には d 句の avanau「原野で」に相当する訳語が欠落している。

[5]JACOBI [1890] は Māgha と Ratnākara が同一主題を扱っている*Śiśupālavadha* 第七章と Harav 第 17 章を比較検討した結果、後者に前者を模倣した形跡があることを明らかにしている。その事実を基に JACOBI [1890] は、Māgha の古典詩を学習することが、Ratnākara の時代には詩人としての名声を欲する者は誰であれ経験せねばならない必須の訓練の一部となっていたと推定する。

[6]辞書編纂の立場から行われた Harav に関する研究として SCHMIDT [1915] がある。彼は Harav を美学的観点からは否定的に評価する一方、語彙目録編纂にとっては Ratnākara がまさしく「宝石を産む鉱山 (ratnākara)」たることを証明すると述べ、Alaka 註を基に第 30 章から第 50 章までの新出語彙を採録した。この SCHMIDT [1915] の研究成果は 1928 年に刊行されたペテルスブルグ辞書補遺にも取り上げられている。

第一章第一詩節

Harav 第一章は「都城の敵と都城の描写」(purāripurīvarṇana) と題する章である。Ratnākara はその第 1–3 詩節でシヴァ、ヴィシュヌ、梵天に敬礼し、第四詩節から第 32 詩節でマンダラ山頂の都城ジョートゥスナーヴァティー (Jyotsnāvatī) を、第 33–64 詩節でシヴァを描写する。同章は韻律 vasantatilakā を基調とし、詩節には長大な合成語が用いられ、Rudraṭa (九世紀後半) が *Kāvyālaṃkāra* (『詩の装飾』) で定義するガウディー体の特徴を顕著に示す[7]。詩節内容は難解そのもので、神話やカーヴィアの常套表現を前提とした〈直喩〉(upamā) や〈詩的空想〉(utprekṣā) がこれでもかこれでもかとばかりに連なり、現代的な文学鑑賞の立場からは悪趣味にすら感じられる。これらの修辞法に加え Ratnākara が時々用いているのが〈掛詞〉の技法である。SHARMA [1966: 216–217] が指摘するように、この技法は冒頭の第一詩節にも適用されており、相異なる二つの意味を読み取ることが出来る[8]。その本文と第一義は次の通りである。

[Harav 1.1]
kaṇṭhaśriyaṃ kuvalayastavakābhirāma-
dāmānukārivikaṭacchavikālakūṭāmi |
bibhrat sukhāni diśatād upahārapīta-
dhūpotthadhūmamalinām iva dhūrjaṭir vaḥ ||

荷のような巻き髪の瘤を戴く御方 (= シヴァ) が貴方方に諸々の幸福を授けられんことを。〔かの御方は〕青睡蓮の花房で美しい花環に似た、夥しい輝きを放つカーラクータを湛える首の美を備え、〔その首の美は〕献供の時〔かの御方が〕御吸いになった、香から立ち昇る煙で青色を帯びているかのようだ。

Rudraṭa は〈掛詞〉に〈語の掛詞〉(śabdaśleṣa) と〈意味の掛詞〉(arthaśleṣa) という二つの下位分類を与える。前者は語の切れ目を変えると第二義が現れるものであり、後者は語の切れ目を変え

[7] *Kāvyālaṃkāra* 2.5: dvitripadā pāñcālī lāṭīyā pañca sapta vā yāvat | śabdāḥ samāsavanto bhavati yathāśakti gauḍīyā || (「〔その文体中で〕二もしくは三〔もしくは四〕語が〔複合している文体が〕パンチャーリーである。〔二個以上〕五つもしくは七つまで〔語が複合している文体〕がラーティーである。〔八つ以上〕可能な限り語が複合していれば〔その文体は〕ガウディーである。」)

[8] 網羅的なものではなく、付された英訳に欠損や誤訳が多い為にそのままでは学術的使用に耐え得ないが、Harav に用いられた修辞法を知るには SHARMA [1966] が便利である。

尚、SMITH [1985] はその第九章を Harav 中の〈掛詞〉の分析に割いている。SMITH [1985: 292–304] は Harav から 13 箇所の〈掛詞〉の例を選び、美麗な英訳を提示して多様な解釈を試みている。しかし詩節の分析や語学的な訳注はなく (この点は BUDDRUSS [1988] が指摘する所である)、二義の対応関係も明確に示されていないので読者は詩節のテキストを再度頭から読み直す手間を強いられる。当該章で SMITH [1985] が主張するのは概ね次のような内容である。

(1) Ratnākara は〈掛詞〉の中で明確に〈情調〉に言及している。Harav 第 17 章第 109 詩節は川と砂浜の光景をシヴァとパールヴァティーが一体化した姿に喩える内容であるが、当該詩節 c 句末の rucirasaikatābhirāmā に「眩い砂浜で快い (rucira-saikata-abhirāmā)〔ガンガー河〕」、「楽という〈情調〉が一体化して魅力ある (ruci-rasa-ekatā-abhirāmā)〔ガンガー河〕」という二義を掛けているように、〈情調〉の和合という芸当を披露している。
(2) Ratnākara は〈掛詞〉の中で音楽や舞踊、演劇論といった主要な学問の術語に言及している。しかしそれは少数の知識者にのみ理解されうる性格のものではなく、学識ある一般人の知識の範囲内にあるものである。
(3) Ratnākara が〈掛詞〉で引合いに出す演劇論は若干の例外を除き Bharata のそれに従っている。

SMITH [1985] は総括として "Ratnākara's use of *śleṣa* is insistent, throughout the poem and throughout the verse, usually, in which it occurs."(p. 304) と述べるが、13 詩節程の例でこのようなことが指摘出来るのか不明である。また SMITH [1985] では SHARMA [1966] は踏まえられていない。

ず第二義を表示するものである[9]。Harav 第一章第一詩節は〈語の掛詞〉と〈意味の掛詞〉が融合しており、両者を分離出来ない。しかし Alaka 註によると、ab 句に跨る複合語 kuvalayastavakābhirāmadāmānukārivikaṭacchavikālakūṭām を kuvalayastavakābhirāmadāmā と anukārivikaṭacchavikālakūṭām の二つに分解すると第二義が現れるという。この場合 kuvalayastavakābhirāmadāmā は〈意味の掛詞〉として「地上で〔自らを〕賞賛してくれる者達に望みのものを与える者」(°dāmā < dāman の主格・単数・男性) という意味を表示する。一方 anukārivikaṭacchavikālakūṭām は〈語の掛詞〉として anuka-ari-vikaṭa-cchavi-kāla-kūṭām「好色なる者達の敵 (= カーマ) と恐ろしい輝きを発するカーラを燃やす〔首の美〕」という意味に解釈され得る。同様に cd 句に跨る upahārapītadhūpotthadhūmamalinām は〈意味の掛詞〉として「首飾りの近くで〔首飾りとしている蛇が吐き出した〕黄色い火焔から立ち昇る煙で青色を帯びている」、c 句の sukhāni は〈語の掛詞〉として su-khāni「優れた感官」と解釈される。以上に従った詩節の第二解釈は次の如くとなる。

> 荷のような巻き髪の瘤を戴く御方 (= シヴァ) が貴方方に優れた諸感官をもたらされんことを。〔かの御方は〕地上で〔自らを〕賞賛してくれる者達には望みのものを与える御方であり、好色なる者達の敵 (= カーマ) と恐ろしい輝きを発するカーラとを燃やす首の美を備え、〔その首の美は〕首飾りの近くで〔首飾りにしている蛇が吐き出した〕黄色い火焔から立ち昇る煙で青色を帯びているかのようだ。

第一章第九詩節

第一章第九詩節はジョートゥスナーヴァティーの都城で愛に戯れる女の姿を琵琶の姿形に喩える内容であるが、ここにも同様に〈掛詞〉を認めることが出来る。

> [Harav 1.9]
> yasyāṃ rateṣu pṛthupīnanitambabimba-
> śobhā sphuraddaśanapaṅktikṛśāṅgayaṣṭiḥ |
> kūrmīva puṣpadhanuṣaḥ priyapāṇijāgra-
> koṇāvamarśamadhurakvaṇitāṅganāsīt ||
>
> そこ (= ジョートゥスナーヴァティー) では、大きくて肉付きの良い丸い臀部をその魅力とし、一続きの歯が眩く輝き、杖のようにほっそりとした肢体をした女が、花の弓を携える者 (= 性愛) を楽しむ時[10]、愛しい夫の爪先の尖った部分で擦られて甘い声を上げた。恰も広くてでっぷりとした丸い共鳴板 (= 胴) をその美しさとし、一連の共鳴部 (= 弦) が揺れ、その指板が杖のように細いクールミー琵琶が、光沢ある、爪の先に付けた義甲で弾かれて甘い音を立てるが如くに。

Alaka 註によると a 句の °nitamba° には「臀部」と「胴」、b 句の °daśana° には「歯」と「弦」という、それぞれ「女」(aṅganā)、「クールミー琵琶」(kūrmī) に対応する二義が認められ得るという。二義の対応を示すならば次の如くとなろう。

---

[9] *Kāvyālaṃkāra* 4.1: vaktuṃ samartham arthaṃ suślisṭākliṣṭavividhapadasaṃdhi | yugapad anekaṃ vākyaṃ yatra vidhīyeta sa śleṣaḥ ||（「そこ (alaṃkāra) において複数の文が同時に構成されるならば、それは〈掛詞〉である。〔その複数の文とは、複数の〕意味を表示することが可能であり、〔同様にその文における〕語の連声が適切に結び付けられたものであり、難解でなく、多岐に渉っているものである。」）、*Kāvyālaṃkāra* 10.1: yatraikam anekārthair vākyaṃ racitaṃ padair anekasmin | arthe kurute niścayam arthaśleṣaḥ sa vijñeyaḥ ||（「単一の文が複数の意味を持つ語で構成されており、複数の意味に対する確定を与えるならば、それは〈意味の掛詞〉であると知られるべきである。」）

[10] 文字通りの訳は「花の弓を携える者と関係する享受行為」である。

	女 (aṅganā)	クールミー琵琶 (kūrmī)
pṛthupīnanitambabimba-śobhā	大きくて肉付きの良い (pṛthu-pīna) 丸い臀部 (nitambabimba) をその魅力とする (śobhā)	広くてでっぷりとした (pṛthu-pīna) 丸い共鳴板 (胴)(nitamba-bimba) をその美しさ (śobhā) とする
sphuraddaśanapaṅkti-kṛśāṅgayaṣṭiḥ	一続きの歯 (daśanapaṅkti) が眩く輝き (sphurad)、杖 (yaṣṭi) のようにほっそりとした肢体をした (kṛśāṅga)	一連の共鳴部 (弦) (daśana -paṅkti) が揺れ (sphurad)、その指板 (yaṣṭi) が杖のように細い (kṛśāṅga)
priyapāṇijāgrakoṇāva-marśamadhurakvaṇitā	愛しい夫 (priya) の爪先 (pāṇija-agra) の尖った部分 (koṇa) で擦られて (avamarśa) 甘い声を上げた (madhurakvaṇitā)	光沢ある (priya)、爪の先に付けた義甲 (pāṇijāgrakoṇa) で弾かれて (avamarśa) 甘い音を立てる (madhurakvaṇitā)

11 世紀のカシミールの著作家 Kṣemendra (990–1066 年頃) は韻律論書 *Suvṛttatilaka* (『優れた韻律の標』) 第二章第 21 詩節、第三章第 19 詩節の説明で Harav から二詩節を引用し、第三章第 32 詩節では韻律 vasantatilakā を通じて自らの著作を膾炙させた詩人として Ratnākara の名を挙げる。Ratnākara の作風は Kṣemendra の著作に影響を及ぼしたと思われるが、Kṣemendra が Ratnākara に言及するのはこの三箇所に限られている。ところが Kṣemendra の仏教説話集成 *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (『菩薩のアヴァダーナの如意の蔓草』、Av-klp) 第 59 章 Kuṇāla には、上掲の Harav 第一章第九詩節の内容と酷似した詩句内容を見出すことが出来る。問題となるのはその第 130 詩節である。

[Av-klp 59.130]
uttiṣṭha gāndharvika kiṃ na vīṇām
aṅkaṃ samāropya kalaṃ kvaṇantīm |
kāntām ivaitāṃ nakhapātalolāṃ
gītiṃ navīnāṃ vitanoṣi kāṃcit ||

歌い手よ、起きよ。〔爾は〕どうして爪傷を求め、甘くささやく妻〔を膝にのせる〕ように、爪で弾かれることを求め、心地良く音を立てるこの琵琶を膝にのせて、新しい歌を何も披露しようとしないのか。

Harav の例に同じく、「琵琶」(vīnā) を比喩対象、「妻」(kāntā) を比喩基準とする〈直喩〉が用いられていることが認められよう。更に興味深いのは Kṣemendra が比喩対象/基準に掛かる形容句に二重の意味を持たせていることである。この点も Harav 第一章第九詩節の技巧と全く同じである。二義の比喩基準、比喩対象との対応は次の如くとなろう。

	妻 (kāntām)	琵琶 (vīnām)
nakhapātalolām	爪傷 (nakhapāta) を求める (lolām)	爪で弾かれること (nakhapāta) を求める (lolām)
kalaṃ kvaṇantīm	甘く (kalaṃ) ささやく (kvaṇantīm)	心地良く (kalaṃ) 音を立てる (kvaṇantīm)

尤もこの一例のみを以て、Kṣemendra が Harav から着想を得て Av-klp 第 59 章第 130 詩節を著したと結論付けることには慎重にならねばならない。我々が今日参照可能な梵語古典文学作品の数は限られているし、そのことを考慮すれば、琵琶と女の比喩表現がカーヴィア詩人の常套表現で

あった可能性も十分考えられ得るからである。Harav、Av-klp はそれぞれ四千、七千詩節を超える大部な作品であり、いずれのテキストも文献学的問題を抱えている為に、両者の文学的影響関係を指摘した研究は未だ現れていない。この問題を論じるにはヒンドゥー教文学と仏教説話文学研究双方の領域からのアプローチが必要となろう。本考察がその端緒となることを願って止まない。

参考文献

BUDDRUSS, Georg 1985 "Bespr. von Goparaju RAMA, *Haravijayam*," *ZDMG* 135-1, pp. 201–202.

—— 1988 "Bespr. von David SMITH, *Ratnākara's Haravijaya*," *ZDMG* 138-2, p. 433.

BÜHLER, Georg, 1877 "Detailed Report of a Tour in Search of Sanskrit MSS. made in Káshmír, Rajputana, and Central India," *JBRAS* extra number, pp. 1–90, i-clxxi.

DE JONG, Jan Willem 1988 "Rev. of David SMITH, *Ratnākara's Haravijaya*," *IIJ* 31, pp. 153–156.

JACOBI, Hermann 1890 "Ānandavardhana and the date of Māgha," *WZKM* 4, pp. 236–244 = *Kleine Schriften* (Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1970), 438–446.

KHOROCHE, Peter 1987 "Rev. of David SMITH, *Ratnākara's Haravijaya*," *JRAS* 119-2, pp. 356–357

SCHMIDT, Richard 1915 "Neue oder im pw. noch nicht belegte Wörter aus Ratnākaras Haravijaya," *WZKM* 29, pp. 259–308.

SHARMA, Santosh Kumari 1966 "Rhetorical Embellishments in the Haravijaya," *JGJRI* 22, pts. 3-4, pp. 203–235.

SMITH, David 1985 *Ratnākara's Haravijaya: An Introduction to the Sanskrit Court Epic* (=Oxford University South Asian Studies Series). Delhi: OUP.

SLAJE, Walter 1995 "Bespr. von David SMITH, *Ratnākara's Haravijaya*," *WZKS* 39, pp. 240–242.

（やまさき　かずほ，広島大学大学院文学研究科特任助教 [インド哲学]）